九州一の怪談

270
280

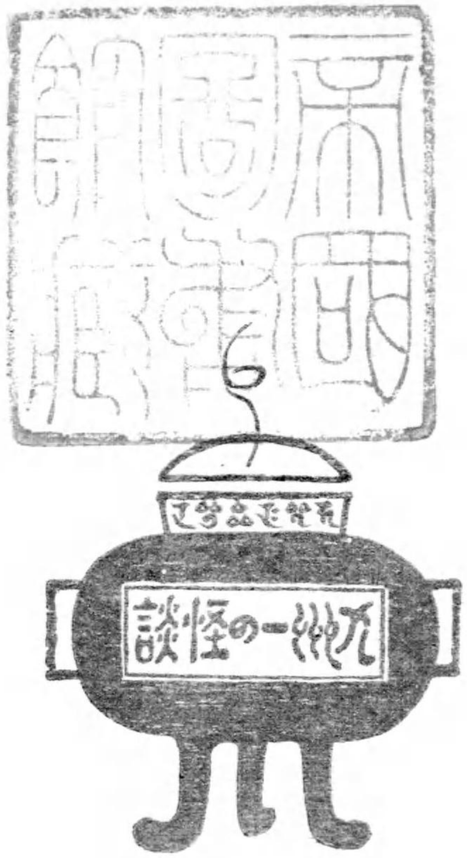
始

九州一の怪談

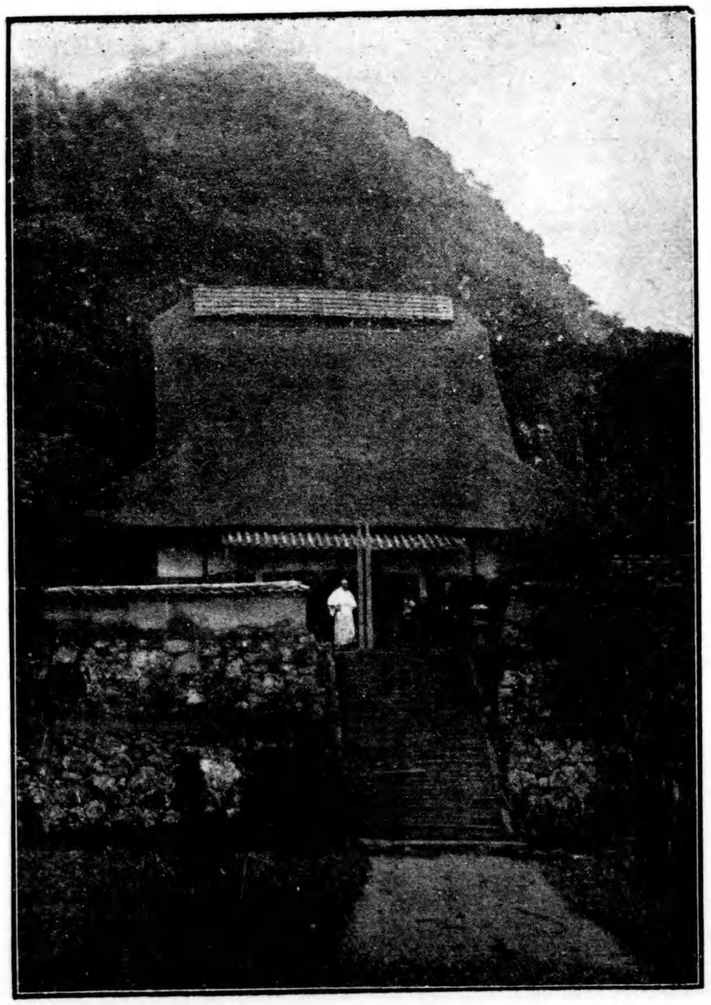
高橋五郎の幽魂

五郎ふ　作

特102
453



大正
4. 2. 20
内交



此の山寺は、筑前國宗像郡の山田地藏寺とて、名も著るき九州一の怪談――宗像大宮司家の菊媛御前、其他五人の亡魂が、天文二十二年から現はれ初め、柩の上に假せた蘆屋の大釜を叩き破つて、九州一圓を暴れ廻り、仇せる惡人輩を一人も殘さじとて、天正十四年まで三十四年間、惱殺し慘殺したるもの實に三百有餘人に達した怨靈の祟――を祀り封じた一大靈場である。九鉄の赤間停車場から西北一里、白山城趾の下、伽藍建ならぬ萱葺屋根の山寺で、春は境内に柳櫻を混き交ぜて落花の雨に苔蒸し芝青く、秋は萩桔梗菊萱女郎花等いろ〳〵の草花しどけなく露に咲き乱れ、筧を傳ふ山の苔清水シト〳〵と泉水に滴りて居る。當山の本尊は菊姫御前其他五人を齋き祀りた六地藏尊。

連城の珠にも代へ難き寶物として、山田地藏寺に秘めある此處繪卷物の一は、往にし天文年間、九州一の美の女神とまで謳はれた筑前國宗像大宮司家の菊姫御前が、十七歳の秋、良人氏雄卿に死別れてより、浮世の無常を觀じ、徒然の餘りの筆の遊戯、畫と云ひ、歌と云ひ、書と云ひ、一代の才媛が涙の痕、恍として紙背に鬱干たるを認むるであらう。

菊姫御前は王族の家に産れ、紫緋紋龍の禁色に纏はる御身なるも、あはれ水の流と人の行末、今や乱臣賊子に咒はれて、山田御殿に薄命を泣く涙を如何せん。起つて行路を望めば、山嶮しくして日は暮れなんか、

かけひのみづのこゝろほそさは

と口占まれた此處繪巻物の一は、涙の人の遺物として、今に山田地蔵寺の寶庫に秘め藏めある。

目次

一　赤城峠の幽靈風……一
二　菊姫御前の祖先……七
三　鍋壽丸の入國……一三
四　陶入道の嚴命……一九
五　照葉の方の陰謀……二四
六　菊姫御前の憤死……二九
七　我怨靈は孫子の末代まで……三五
八　侍女四人主難に殉ず……四〇
九　怨靈の眼……四五
一〇　山田御殿の人魂……五一
一一　土橋氏康の彦山攻め……五六
一二　三千の寺院より撞出す鐘……六一
一三　氏續卿立腹を切る……六六

目次

一四 千代松丸を田樂刺……七一
一五 怪談の黑幕切つて落さる……七七
一六 鬼一口に母御前を喫殺す……八四
一七 瀧口の館に怨靈現る……八九
一八 此鬱憤を晴さいで置うか……九五
一九 宗像一圓は大伏魔殿……一〇〇
二〇 永祿より天正年間の筑前……一〇五
二一 九州大亂と怨靈の祟……一一〇
二二 現世からなる無限地獄……一一五
二三 宗像大宮司家持城の地割……一二一
二四 墳土に偃せた平釜は粉微塵……一二七
二五 赤間表の大合戰……一三二

目次

二六 宗像家滅亡の前兆……一三八
二七 毛利大友兩家の筑前戰……一四二
二八 怨靈の白羽亂れ飛ぶ……一四九
二九 呪の手に吾身を遊ばんかな……一五六
三〇 鈍刀もて寸斷に慘殺さるゝ……一六一
三一 チク〳〵と針で刺すやう……一六七
三二 平和を保つ政略上の婚姻……一七三
三三 血の池地獄に生埋す……一七九
三四 怨靈の呪は蜘蛛手十文字……一八四
三五 生前に自筆の花押を認む……一八九
三六 涼風百味の飲食を味ふ……一九五
三七 一念彌陀佛、即滅無量罪……二〇一

自序

―（大正四年一月）―

「九州一の怪談」は嘗て我福岡日日新聞紙上に「怨靈の祟」と顏して連載した讀物の一であつて、且はお伽草、法話、謎、歷史等としても、多少は共鳴せる反響が有るかも知れん……が夫れにしても不思議な風の吹き廻しで、當時讀書界から過分に歡迎されたさうで「史實の乾燥を補ふ時代の要求だ」と、書肆に奪ひ去られ、大ビラに出版さるゝことになつた。

抑や書肆のお世辭か、將た耻ぢ曝しか、頓と其邊御存知ない自分には、獨だ無上に樂ッたいやうな、可笑いやうな、又た流石に嬉しいやうな感じがしてならぬ。――誰だ背後でクス〳〵嗤ふて居るのは!?。ソレ今に怨めしいと出て來るぞ、ヒユー、ドロ〳〵〳〵

九州一の怪談

福岡日日新聞記者　竹林庵主人著

一　赤城峠の幽靈風

九州を通じ、お國怪談さま〴〵あるうちにも、往じ天文二十一年三月二十三日月待の夜、筑前國宗像郡山田邑白山城主宗像大宮司家の婦女六人、あはれ亂臣石松但馬、嶺玄蕃、野中勘解由等が非道の兇刄に血塗られ、口惜の涙拭ひも敢へず玉

の緒絶へて黄泉の客となりしも、怨めしの魂魄は浮び得て宙に迷ひてか、亡霊の祟りたそろしや、一周忌に相當する翌天文二十二年三月より暴れ初めて、天正十四年まで三十四年間、六人の怨霊は交る〴〵に姿を現はして九州一面を暴れ廻り、積怒の餘焔は炎々と燃へ爛れて、遠く中國地にまでも飛火なし、仇せる悪人們は一人も殘さじとて、悩殺し、喫殺したる者實に三百有餘人。爾く猛烈を極めた血腥い怪談は、九州廣しと云へども類ひ双と無い。されば後世の人々が身の毛を戦慄て、山田邑に寺院を建立し、六人の怨霊を鎮め祀らんため六道能化の六地藏菩薩を本地として安置し奉りた。で漸次のこ

と怨霊の祟り鎮靜り、是れまで祟の猛烈であつただけ、亦た其れだけ霊現赫灼にて、兒なき者には稚兒を授け、縁なき者には良縁を結び、貧を惠み、病を助け、身を六道に分けて一切衆生に濟度し給ふより、朝夕參詣人の群をなし、世に『筑前山田の地藏』とて、九州名代の一大霊場に數へられて居る。

* * * * * * * * * *

天文二十二年三月十八日、嶺玄蕃は何か心願の筋あつてか微行にて筑前鞍手郡蒲生田の觀世音に參詣なし、其の歸途、宗像郡赤間町藤原の内、赤城峠に差し掛り、吉留村の吾家近くなつた頃は、早や夕陽も西に落ちて暮なんとする黄昏時、何

れの山寺より撞き出された餘波にか、暮れ六つの鐘、山を離れて餘韻長く微かに聞ゆる折こそあれ、玄蕃は總身急に水を浴びたらん如く悪寒を覺へてガタ〳〵胴震する。遇と前途を眺むれば白雲ならぬ白氣濛々と立籠て微溫ひ風ソヨリ〳〵。玄蕃は思はず眉を昂げ、眼を睜つて、濛々たる白氣を排ひ行かんとしたが、亦も何物か眼前に忽焉と白く現れた。屹と見れば這は何事ぞ女房二人悄然として彳み居る——鮮血に染める白衣纏ひて、蓬なす黑髪垂れ被れるは、思ひきや、前年自分們が逆殺した宗像大宮司家の後室山田局と侍女花尾の局であつた。何條にも怨めしさうに磴と此方を白視た其物凄さ。

不敵の玄蕃も遉に心の騷ぎてか『亡人血迷ふた喃』叫びも敢へず拔き打に發矢と斬り掛けた……なれど何んの手應へも無い。紫電ノ〳〵、四角八面に薙ぎ拂ひ、斬り捲りたが、怨靈は變幻自在、風の如くに消へ、雲の如くに舞ひ、出沒して捉へられぬ。兎角するうち、日は暮れて、夜は次第に更けもて行く。只見れば蔦ケ嶽の山上に一痕の月朧ろ澹として無からんず、それか、あらぬか、二人の怨靈は前に後に現れて摑み蒐る。果は玄蕃の手足勞れて働かず、命辛ら〳〵吾家に歸るや、忽ち大熱を發して瓦破と打臥し『吁苦しい！〳〵』と空を摑んで悶へに悶へつ終に狂ひ死した。之と同時に玄蕃の妻子兄弟七

人まで亦た齊しく怨靈に祟られて惡寒に撲れ、丁度怨靈の一周忌に相當する同月二十三日に、玄蕃家一族は大方に惱殺されて了ふたのである。されば『赤城峠の幽靈風』とて古を語る怖ろしの口碑は、今に坊間に傳つて居る。

如上、語る處は九州一の怪談として怨靈の祟り初め、暴れ初めの入題を仄すに過ない。由來果あれば因ある小車の旋る泉源に溯つて深く古老に問ひ、廣く口碑を溫ね、又は古記錄等を漁りて一々引證を得た山田地藏の怨靈戰に、永祿天正間の九州大亂を背景に描り、矢叫び劒吼る旦、風黑く雨白き夕、鬼哭愀々、人に逼るの狀、卒や是より具に御照介致しましやう。

二　菊姫御前の祖先

世にも怖ろしい六人の怨靈を祀り封じた筑前國宗像郡の山田地藏寺と云ふは、實は山號を妙見山と稱へ、增福院と云ふが正銘である。なれど本尊の地藏菩薩で名高くなつたので、而して寺が山田村に建立されてあるので、維新以後、誰れ云ふとなく、山田の地藏寺と呼び傳へ、現に赤間の停車場に樹てある名所の標札にすら『山田地藏寺』と書いてある。寺は停車場より西北一里、白山城趾の下、伽藍建ならぬ萱葺屋根の山寺で。春は境内に柳櫻を混き交ぜて、落花の雨に、苔蒸し、

芝青く。秋は萩、桔梗、苅萱、女郎花等、いろ〳〵の草花しごけなく露に咲き亂れ、月の雫や、筧を傳ふ山の苔清水シト〳〵と泉水に滴り落つる。夫れにつけ座ろ思ひ出さるゝは、當山の本尊六地藏菩薩の一に祀られある宗像家第七十八代氏雄卿の御内室菊姫御前が自筆の御遺物とて連城の珠にも代へがたしと、今に當院の寶物庫に秘藏されある自畫自賛の繪卷物の内、

おもひやれ、とふ人もなき山中に、
かけひのみづの、こゝろぼそさは、

と口占まれた、在し昔の涙偲ばれて訪ひ弔ふ人の袂を潤す者

が多いであらう。

此處、菊姫御前の祖先を溫ぬるならば人皇第五十九代宇多天皇の御子清氏親王と申し奉る。延喜十四年に民間に下りて正三位に叙せられ、中納言に任ぜられ、筑前一國を賜りて、宗像三社の大宮司を勅命せられ、始て宗像に下向せられたので姓を宗像と改め、田島の里は片腋と云ふ處に殿作して住はせ給ふたのである。

宗像三社と申すは、天照大神の産みませる田心姫、湍津織姫、市杵島姫の三柱の御神を齋き祭れる大社であつて、昔は毎年祭禮の當日には奉幣の勅使を下されたほどであつたが、

皇族の清氏公が大宮司に任ぜられてから、勅使下向を差止められた、後ち宗像家第四代目妙忠卿の時代から家系は公家社家の二つに分れ、公家は蔦ケ嶽に居城して世に中納言殿と稱へられ、社家は初代のまゝ片腋に住まひて一般に領民より尊敬さるゝこと一方でない。

世は六波羅の全盛期より、鎌倉幕府の天下に推し移つた頃は、早や宗像家の領土は四方の群雄に大半蠶食せられ、神領として殘るは宗像領の外、肥前の晴氣三百町、豐後の大豆俵四十町、壹岐の藥師丸二十五町、併せて僅に八百七十五町しかなかつた。さる程に建武三年足利尊氏九州沒落の砌、宗像家の當職第五十二代氏俊卿が他家

に率先して味方なし、數度の合戰に拔群の軍功を現したので尊氏の武運開けて後ち厚く恩賞に預り領土も再び恢復した。

が足利の天下亦た漸く搖れ動くにつれて、會ま宗像家第七十一代興氏卿と、第七十二代氏佐卿との同姓同門間に勢力爭起り、所謂血で血を洗ふた結果、宗像家は再び衰運に傾いた。

當時、九州の豪族と云へば先づ大友、島津、龍造寺の三家に指を屈せねばならぬ。亦た近く周防には大内義隆と云ふ豪傑が居て、何れも四隣を併呑し、合戰小休なき亂世であつたので、是まで諸國守護の支配外に立つて居た王族の宗像家もあはれ浮世の荒波には敵し難くてか、第七十二代氏佐卿より

節を折りて大内家の幕下に屬した。で宗像領は大内家に管領せられ、氏佐は周防の山口に出仕して長門の深川、黑川両庄を賜はり、黑川に屋形を構へ居たので時の人は黑川殿とも稱へた。此の黑川氏佐の子正氏と云ふが宗像第七十七代を相續し、黑川の屋形に三年の勤番中、大内家の權臣陶晴賢の姪を妻り二人の子を擧く、兄を鍋壽丸と號し次は姫君で右つたが、正氏は本國筑前宗像山田の御殿に本妻が居て、菊姫と云ふ一人の姫君すらあつたゆへ晩年山田に隱遁し、先代氏續の嫡流氏光を養ふて菊姫に配せた。氏光は後ち氏雄と改名す。

天文廿年九月、大内義隆は逆臣陶晴賢のため長州の深川大

寧寺にて自殺した。時に氏雄も主難に殉じて戰死した。年少に二十三——以上述ぶるところは由緣ある宗像大宮司家第七十八代までのホンの略歴を摘要だゞけ。即ち第七十八代迄は本問題に直接の關係ないので委しき事は冗長しきまゝ故と省いたのである。

本問題に入るは愈よ是からだ。正腹の菊姫と妾腹の鍋壽丸これが本篇の主人公となつて卍巴に渦を捲き、世にも怖ろしい怨靈の祟を惹起したのであつた。

三　鍋壽丸の入國

美人薄命とは誰が言ひ草か偖も露しげき浮世ではある。宗像大宮司家の菊姫御前は皇族の家に生れて才色ともに一代に秀で、當時九州一の美の化身とまで謠はれたほどの果報を持ちながら、柳櫻をこきまぜた都の空の月花だも知らず、あはれ西海の邊陲、筑前宗像郡山田の御殿に一人薄命を泣く身の哀を何とかせん。大樹の蔭と頼み居た主家の大内氏は一朝にして滅亡なし、夫れ啻ならず比翼連理と契り罩めた良人氏雄卿すら主難に殉じて鬼籍の仁となり、又た父正氏卿には早く死別れて、杖柱とも頼むは後世に殘りた母君唯一人。『噫、此の前途は甚麼なるだろう……』思へば〳〵天も地も一時に消

滅ばかり、喃々と泣き沈みては、袂も朽ちて、雨宿りする軒も無い。

無常の風は天地何處まで吹き荒むであろうか、運命の手は涙の人を那邊まで弄るであろうか。天文廿年九月一日、菊姫御前は主家に離れ、剩へ良人を亡ふて旦暮れ涙の干く隙もない同月の十二日に、長州表より宗像家妾腹の鍋壽丸が突然筑前に乗り込み來り、白山城に入城した。這は云ふまでもない本腹の菊姫御前を排除て神領六萬石の宗像大宮司家第七十九代を相續せしめんとて、生母の伯父に當る彼の陶晴賢入道が腹黑い畫策に外ならぬ。それと云ふも當時入道は主君大内義

隆を殺して早や中國を切り從へ、虎狼の猛威當るべからざるものあつて、惡運日々に强く、勢旭の登るばかり。されば此上何條に横紙破るも誰が何んと非難すべきと、冒頭から宗像家を呑んで掛つたのである。乃て自分の姪で、先頃まで菊姫の實父正氏卿の寵妾であつた照葉の方の腹に產れた鍋壽丸とて當年七歲の麻呂を長州黑川の屋形にて元服させ、宗像四郎氏貞と名乘を揚げ、後見には生母照葉の方と寺內治部丞秀里と云へる股肱の腹臣とを附き添へ、數多の家臣に警固させて前觸もせず突如け筑前に入國せしめたのであつた。

降つて湧いた此の椿事には、宗像大宮司家の一家一門、家

人に到るまで、寢耳に水の不意打を喫ひ、一時途方に暮れて下を上へとの大騷ぎ。心ある者は誰一人として陶入道が傍若無人の擧止を憤らぬ者とては無い。餘りと云へば餘りの非行。此儘に泣寢入つては宗像武士の面目一分も立たぬ。相手が横に車を挽くからは當方にも屹と思案ありとて、一族中より器量ある殿を菊姫御前に再び迎へ參らせんと云もあれば、又氏雄卿の實弟にて年僅に三歲の千代松丸殿に相續せしめんと云ふもあり、中には利に奔り勢に媚ぶる輩もありて氏貞卿に欵を通じ、そのため宗像領內は二派に分離た。氏貞卿一味は陶入道を後楯とし、寺內治部丞を謀主として白山城に立て籠る。

菊姫御前一派は氏雄卿が實家の實父宗像第七十七代氏續卿を老大將と仰ぎ、吉田入道宗榮、同内藏助等が參謀となつて蔦が嶽の城を根據とす。双方ともに城壁を構て歩一歩だも讓らぬ。此方が陶入道の無道を罵れば、彼方は陶殿の威を嵩に鷺を烏と云ひ黑む。双れも眦を裂いて口角泡を飛ばし、間一髪ば腰の物引ん拔て火花を散さん怖しの氣色。今日も論議、明日も論議で、口論絶ゆる隙とてなく、何時結論ることやら分らない。血氣に逸る若侍等は腕の力瘤が鳴動て承知せず、敵も味方も早や殺氣を漲らして燒太刀の反うたせ、鯉口三寸寛げて居た。

四　陶入道の嚴命

正腹菊姫御前と妾腹鍋壽丸との間に起つた宗像大宮司家相續爭の口論は双方ともに火の手が強く、火焔吐かんばかり舌を爛らして論議を鬪はしたが、終局が附かぬ。で宗像の若侍們は痺を拔かして最う起ち上らずには居られない。無益の詮議に日を曠くしやうより、一擧して當の本尊氏貞殿を亡きものとし、序に後見寺内次部を斬つて棄てなば、此の問題は立ろに解決する。此の場合に因循姑息、何をか躊躇ことのあらう、と内議は之に一決して、好き機會もがなと、おさ〳〵密

議を凝して居た。

偖て又た氏貞方の寺内治部丞は、案外にも菊姫方の宗像武士が鼻息荒きに、若し寝首でも搔れてはと、入國以來、些の油斷もせぬ。常に間諜を蔦ケ嶽の城内に忍ばせて、人知れず動靜を探らせて居たので、若侍們が密議の大事、早くも聞き出し、駭くこと大方でない。此處先んずれば敵を制し、遲るれば敵に制せらるゝの境。宗像黨が爆發前に當方より短兵急に逆襲するこそ妙案なれと、寺内は自から總大將となつて采配を秉り、宗像黨の油斷見澄し、詐つて城外に誘き出し、亦も不意打ちなして數多の人を打殺した。此時、大將の寺内は

身を衆に挺んでゝまで奮鬪したので、左の手に敵傷を負ふたが、思ふ儘に菊姫方の鼻柱を挫て凱歌を揚げたので、陶入道より天文廿年十月二日附を以て『粉身の次第、神妙の趣、其意を得たり』と鳥の子紙に筆太く認められた感狀を賜り、大に面目を施したのである。さあれ宗像武士は一時頓挫はしたが亦も盛り返して活氣を帶び來り、何條にも氏貞の世嗣を承認しない、何時火の玉の破裂せんも知れざる氣色すら見へ、宗像大宮司家の相續は宙に迷て容易に未だ決しない。此事に就け全權を委られた寺内は夫れゆへ氣が揉てならぬ。或は急飛脚、或は早打もて右の始末を長州の陶殿に注進に及び、指

圖を乞ふ。

櫛の齒を挽く注進に、陶入道は烈火の如くに憤りた。『最早片時も容赦相成らぬ。後室及菊姫は勿論の事、氏續及千代松丸もろとも細首丁と打落して實檢に供へよ』この嚴命。

之より先き、氏貞の生母照葉の方は、何とかして一日も早く我子を世嗣に定めたく、心の駒の逸るにつけ、眼の上の瘤とも云ふべき邪魔物は、正腹の併も年長の菊姫御前である。乃で姫と其の生母とを世に人知れず亡きものにせずば、所詮我君の四郎氏貞卿が御代となさんこと思ひも寄らじと、ムラ〳〵心の鏡曇りては、子ゆへに迷ふ凡惱の、人か鬼か、見界

すら附かなくなつた、實に昔より女性の外面は菩薩に似たれど、內心は夜叉よりも怖ろしとは道理か。照葉の方は此事誰に賴まんかと、其れとなく人橋架けて詮議の末石松但馬守、嶺玄蕃、野中勘解由の三人こそ無比き不敵者よと目星を打つた。折から陶殿の嚴命があつたので、是れ幸と早速に石松但馬を白山城內に招き入れ、先づ屹度他言せまじとの金打を見屆けて後ち、涙を袖に胸の大事を明したのである。あはれ世に便りない埋木の我等母子二人がため、此度の大事を首尾好く仕遂げ賜はらば行末長く一大恩人として尊び事へんと、歔欷しながら搔き口說く。

五　照葉の方の陰謀

石松但馬守は宗像家の權臣で中老職を務めて居た。殊に老人でもあつたゆへ、山田の御殿には時々伺候して後室や姫君の御側近く進み出る便宜があつた。乃で照葉の方に屹と見込れて殺害の大事を賴れたのである。賴まれて石松も之には礙と當惑なし返答もなく俯視く。

照葉の方は其れと見るや、忽ち柳眉を逆立て、膝を進めた。偖は不承知よな。人もあらうに男の内の男と見立て、斯る一大事を賴みたも、獨だ我産みの君樣が可愛さばかりに云ふの

では無い。第一に宗像家の安泰を祈ればこそ。此ごろ巷の噂を聞くに、宗像家も今では後楯の大内殿を亡ふたので、毛利、大友、島津、龍造寺、其の外如何なる豪族等が亦た何時群り起つて菊姫御前を擁立て、宗像領を横領せんも計り難ない。殊に山田の後室は才幹もあり膽力もある男優りの御方と聞けば、此行末亦た〳〵如何なる椿事を企圖んも知れぬ。されば獅子心中の虫にも齊しい御方なりと云ふ。斯る方樣達を我君樣に正統の御母君、又た御姉君と仰がせんこと心外至極。腹こそ違へ、四郎氏貞卿とて、菊姫御前とて、同じく正氏卿の落胤。されば宗像の家人として君とし仰ぎ、双れも双れ、何に

毛嫌ふことのあるべきぞ。否や〳〵氏貞卿こそ男子に生れ、宗像家を相續すべき正格の嫡流であらう。加之か當時飛ぶ鳥落す陶殿の膽煎り、开を水泡と打消さば、會ま膽煎主の怒を買ひ、此の前途き如何なる大事を惹起さんとも限らぬ。嗚呼胸痛く、心苦しやとて泣き沈む。實に怖ろしきは女の涙。果は自害せんとまで脅し賺しつ泣き口説かれて、石松も何時か涙ホロリ照葉の方が訴ふるところ一々理あるもの、如く聞ゐ、宗像家の爲めならばと、我知らず泣き落されて、淺間しくも暗殺の一味に同心したのである。

照葉の方は之れでこそ大願成就したれと、窃に胸撫で下し

た。宗像家の大奥に對する方寸は照葉の方が主となつて取計ふ。而て亦た表向の評議や、軍の掛引等は、寺内治部丞が獨り其衝に當つた。先づ着々歩を進めて天文二十年十月より十一月にかけて再度の軍を起し、姫君方の參謀吉田宗榮、同内藏助等を始め、與力徒黨の者ども、大方に討ち夷げて了たのである。されば寺内治部丞は陶入道より十一月五日附を以て再度の感狀を賜はり、越ゐて天文二十一年二月十七日、更に破格の恩命あつて祿高を加增せられた。

氏貞卿の一派では斯く一方には恩賞を行ふて壯に人心を收め、他の一方には威武を張つて大に壓迫を加へたので、姫君

方の總大將氏續卿は宗像領内に居耐たまらずなり、出奔して豐前の彦山に難を避く。氏續の子千代松丸は生母辨の前に抱かれて宗像領内の沼口と云ふ草深い片山里に身を隱す。

世は刈菰の亂れにつれ、宗像一家一族のうち、就中て哀を印象たは、山田の御殿に取り殘された後室と菊姫御前。今は有れども無きが如く、楚歌の聲四面に起りて、旦をまたぬ露の命、あはれと云ふも愚であらう。之に反し、照葉の方は一般に『大方樣』と尊び敬はれ、田島の向へなる田禮邑瀧口と云ふ景色好き處に新しき屋形造して住い居た。

天文二十一年三月二十三日は、山田の後室及ひ菊姫御前が

一生を通じ、忘れやうとしても忘れられぬ大惡日であつた。なれど固より神ならぬ身のそれと知る由もなく、今宵は二十三夜の月待の夕であれば、切て胸の涙の幾分かを慰めんとて姫は宵より浴びして精進潔齋に身を淨め、月を拜まんとて小夜、小少將の二人の侍女に冊れ、長廊を渡りて奥庭に降り、筧の水の泉水に滴る邊を漫歩す——姫を殺す非道の刀は門外に窺ひ、死の運命は姫の身に歩一歩近きつゝあつたのである。

六　菊姫御前の憤死

石松但馬守は照葉の方より主君の御後室山田局と菊姫御前と

を人知れず殺害なしくれよとの切なる御賴みを受け、一時は大方様の威嚴に怖れ、且つ宗像家の爲なればと思ひて終に同心したるものゝ、偖て退いて心靜に思ひ返せば、昨日まで現に主君と仰ぎ事へ奉りた大奥に反逆の刄を推さんこと、何條にも胸苦しくて自ら手を降しかねた……さりとて武士の詞に二言あるべき筈もない、左考右思、思案の末、漸く心を鬼にして右の大事を腹心の野中勘解由、嶺玄蕃に語らひ、强て討手に向はしめたのである。

天文二十一年三月二十三日の夜は、宵より空雲翳なく晴れて、月影は百花に映つり娑婆として庭に落つ。亦た月の光は

一段に清く庭の泉水に金波銀波を漂はして番ひ離れぬ鴛鴦の夢穩に、得も云へぬ景色である。菊姫御前は薗の草履にシトく〻と露を踏んで、月白き此處の庭に彳む。切て涙の身の涙の痕を病後の袖に乾かさんとか、檜の扇を月に翳して花を眺め、鴛鴦を眺むるにつけ、座ろ思ひ出さるゝは亡き殿のこと、忘れんとしても何ご忘れられやう。思へば〳〵在りし昔の空戀しくて亦た悲くてならない。それぱかりか此頃人の噂には刄を磨ぎて山田の御殿を尾け狙ふ曲者すらありと云ふ。其れや是れ、思ひ廻せば寧そ此ま、今宵の露と化つて花に眠り、月に醉ひ、鴛鴦の思羽、夢暖く、此の美しき眺めの底に消ゐ

も入りたき心地ぞする。されば侍女の小夜、小少將們が、花を折り、水を掬びて言葉優しく慰むるも耳朶に入らぬ。獨だ空行く月の逍遙を餘念なく眺め入る折こそあれ。何事か消魂しい人の足音。ふと局の内を回視れば、野中勘解由が卒事に椽端近く伺候して居る。姫はハツと胸轟ろ、早くも其れと推し、急ぎ座に上りて勘解由を屹と睨め、音聲男々しく『夜陰にかけて大奥深く何に用あれば出頭た。餘も平常ではあるまい』云ひも畢へず早足に勘解由が胸の邊を丁と蹴る。蹴られて頭顛倒と椽下に顛げ落ちた。が齊しく拔く手も見せず『ヤツ』と氣合の聲もろとも刄の背擊に姫の腰車鋭く薙き拂ふ。此の

時、姫は身を蝶鳥の如くヒラリと反しつ、手に持つ檜扇にて發矢と受止めたが、扇は綴りの糸斷れ、バラ〳〵となつて擊ち落され、仇の刄風に左の股を痛く薙ぎ拂はれたのである。颯と迸る血汐は雪耻しき膚を穢し、姫は苦痛の悲鳴を揚げて座に倒れた。偖は背擊と云へ、拳の冴へに、羽二重のやうな肉を散々に傷られたのであらう。去にても口悔しきとや、平常も長船久光の匕首を護身用に懐中して居た姫が、今宵に限り湯上り姿の其儘、月に憧れて油斷したは嘸ぞ御無念であつたらう。縱し病後の御身なればとて、若し遭難の今宵、姫が手に打物だにあらば女ながら爭はか失敗は取るまじきものを。

殊に膂力は人に勝れて五人力あつたと云へば、足斬られずに進退自由であつたなら、曲者の生首位ひ立ろに引ン拔いたかも知れない。

小夜も小少將も周章狼狽。奥へ奔つて長押の薙刀採り下さんとする。

野中勘解由は此隙に逸早く椽の上に馳け上る。白刄を後手に屹と視れば這は……姫の唇よりは鮮血瀧の如くに混々と流れ出づ。是れ舌三寸嚙み斷つて、自から四大空に歸し給ひしかく『南無阿彌陀』唱ふるも口の内。突と進み寄つて鮮血淋漓の姫を片敷き、止の一刀。あはれ花なれば盛り、當年十

八歳を一期として無常の風に散り亡せたのである。

此時、母君の後室は離れの佛間にて獨りお經を讀んで居たが、表の長局に方り卒に女の魂消る聲、續いて長廊を渡る荒々しい人の足音、程もなく花尾局と三日月の侍女二人、手に〳〵薙刀提げて佛間に馳け入り來る。『姫君樣、一大事ございます』云ふも涙に舌戰きてたろ〳〵聲。

七　我怨靈は孫子の末代まで

山田の後室は珠數投げ棄て、血相變てスツクと起ち上つた。帶の間なる錦の袋より吉久の懷劍キラリ拔き放ちて逆手に握

り屹と身構す。姫の身上心もとなきまゝ、佛間より馳け出んず出合ひ頭、早や足下近く打寄する仇波、嶺玄蕃にハタと出合ふたのである。見れば手に白刃を提げて人を斬らんと勢負ひ居る。

素破君樣の御大事と、侍女花尾局、三日月の二人は健氣にも薙刀を水車の如く打ち振つて直ちに仇と渡り合ふ。固より決死の覺悟とて女ながら鋒鋩鋭く陽炎電眼にも止まらぬ、丁發矢と火花を散して鬩ぎ鬪ふた。

表の長局では、小夜と小少將の侍女二人、現場も去らず姫君の御仇、切て一太刀なり酬ひんと踏み止り、野中勘解由に

刄向つて、巴五字と薙刀を亦た打ち振つて居る。野中は是れまで千軍萬馬の間を往來した剛者、殊に早太刀の名人であつたゆゑ、見る〳〵うちに小少將を大袈裟に掛け斬つて落した。返す太刀にて殘る細首宙に刎んと刄風物凄く薙ぎ拂ふたが、小夜は輕傷小々負たるばかり、劍の風を潛り脫け潛り脫けて壯烈に戰ふたのである……が其内次第〳〵に息氣喘ぎ、精力衰へ、仇の打太刀敵對かねて浚巡となり長廊指して逃げ出す。逃ぐる背後より勘解由は血刄振り翳し、息氣も吐かせず逐ひ蒐くる。

花尾局と三日月は佛間の入口に立ち塞がつて、此内には曲

者を一歩も踏み入れじと薙刀の秘術を盡し遮り防ぐ。玄蕃は堂々と大床踏み鳴らし、太刀を電の如く閃して邪魔者を斫り伏せ、佛間に亂入せんと敦圉く。

折しも小夜は長廊を駈け拔け來る。唯だ斷末間の後室樣を一眼拜みたく又た姫君の御生害の有樣をも告げ參らせんと、氣を張弓に白羽を番ひ、猛心を奮ひ起して討手の嶺玄蕃が背後より斬つて掛る。玄蕃は不意を打たれて立ち惑ふ。火花を散して斬り結ぶ打物の下『小夜さま』と呼ぶは三日月。『姫君樣は』と尋ねるは花尾局。此の時勘解由は早や犇々と逼り來り、小夜は前後に仇を受けて何條にも答ふる隙とて無い。吐

く息氣、吸ふ息氣白くなるまで、双方とも入り亂れて此處を先途と鎬を削る。

佛間より此の亂戰を見た後室は無念の切齒キリ〳〵嚙み鳴らして髮逆立て、眼を瞋らして爛乎と仇の二人を睨めたのである『偖は噂に違はず曲者達は我等を殺しに襲來りたか。家臣として主君を殺す人非人。恨は骨髓に徹して世世に忘れぬぞ。今に見よ〳〵我の怨靈は孫子の末代までも祟をなして虎狼の一家一族を惱殺し、我宗像領内には草茫々と生して見する。我は女ながら王族の末裔、爭で人非人の刄に血塗られ、穢はしき錆と消へ亡せうぞ』と甲奔つた聲は人の肺腑を犇々

と衝く。遉の不敵者も思はず顔見合せてガタ〳〵胴震したのである。

八　侍女四人主難に殉ず

山田の後室は眼前近く虎狼に襲はれながら今は却々に悠々自若として迫らない。姫は既に業に死したであらう。母の我も死なんとて、一たび死を決したる以上は世に何をか怖ろしいものがあらう。と心靜に觀念した後室は遽色たる姿態を搔ひ調ひ、嚮に投げ棄てた珠數拾ひ上げて祖先の佛壇に向ひ、香を拈じて一心に回向する。軈て白綾の腰帶スル〳〵と引き

解きて正座せる女の膝の亂れぬやう牲と結束り、經机の上に置いた吉久の懷劍を再び逆手に握り襟寛げニツコリ頬笑たのである。鬢の毛一筋だも亂さず、美事に咽喉搔き切つて自害した。其の雄々しさ、其の立派さ、見る人誰も轉た感に撲れて、眼を駭さぬ者ではなかつたと云ふ。

四人の侍女們は戰ふうちにも後室の事氣に掛りてならぬ。就中て花尾局は平常に後室の御側離れぬ御氣に入りであつたゆへ氣が氣でない。白刃の隙を潛り奔つて佛間へと駈け入つた。後室の御先途屹と見屆け申さんと、血に染める御顏を佛壇の燈明に透して拜し奉れば、無限の笑を含ませられて、毫

もこりみだしたる色もなく、御生害の其の美事さ。豫て斯くあらんとは期したるものゝ、亦た今更のやう胸塞る。『嘸ぞ御無念で……』聲は涙と爭ふて斷續。『局もお供いたします』云ふも咽び泣き。後室の御自害せられた吉久の懷劍、滴る血汐を末期の水、潤ふ喉に劍を當て、身を壓して瓦破と臥す、穗先は白く裏搔いて通る。爾く氣性の烈しかつただけ、亦た後世までも怨靈の祟りが一段に猛烈であつたやうだ。

殘るは小夜と三日月の二人。命のあらん限り、打物の折れん限り、現世の名殘り、冥土への土產、仇の五體に一つでも數多く傷けて死なんものと、其れと云はねど以心傳心、心は

一つ。互に曳々と聲を掛けて奬勵ながら、死物狂ひ獅子奮迅の勇を鼓吹て、逐ひつ逐はれつ渡り合ふ。閃く薙刀は風に戰ぐ薄と亂れ、打ち込む燒太刀は雲に流るゝ星のやうだ。斬りもし、斬られもして滴る血汐は九つの局を穢し、宛ら秋の紅葉の庭に散り布く風情に異ならぬ。

隈なく照す二十三夜の月の光を浴びて誰れ彼となく渡り合ひ、此處彼處にと戰ひ居た小夜は運拙くも滴る生血に足辷らして尻居に揑と倒る、途端、嶺玄蕃より薙刀丁と打落された。吁と思ふ隙もなく眞向かけて斬り込まれ、思はず白刃を掴みたので十本の指ポロリ斬り落さる、其れと同時、左の肩先よ

り小袈裟に斬られ、終に止を刺されたのである。

三日月は眼前に之を見て遺る瀬なく無念口惜しい。なれど自分も野中勘解由に斬り捲くられて數ケ所の重傷を負ひ、最早や激しく戰はれぬ。で今は此迄なりと觀じて薙刀を勘解由に投げつけ、懷の匕首拔く手も見せず立ちながら自害して死す。噫、女ながら孰れも孰れ克くも戰ふたりな。大漢の併も剛者二人までも思ふがまゝに駈け惱して後ち、主難に殉じて天晴の大往生。後世までも烈婦の鑑として仰がれ、不滅不死の靈魂は菩薩に祀られて今に物語の種となる。聞く者誰か感歎の涙に暮ぬ者があらうか。

九　怨靈の眼

花に飛ぶ鶯、水に鳴く蛙、散る花に情あれば、流るゝ水にも心ある。其れに何事ぞ、山田の御殿に宮事する數多の女房達は、御殿に仇波打寄すると聞くや、無情にも主君の御大事を外處にして我先にと何處へか逃亡たのであつた。否や、其れごころか譜代恩顧の家臣まで、今宵の大騷動を豫知し居たか如何だか、當日の早天より宗像領を引上げて大島まで落ち延びたのであつた——之に反し侍女花尾局、小夜、三日月、小少將の四人、何れも妙齡の乙女でありながら、天晴れ主難

に殉した忠節は、世に沒せんとしても沒せられない。

討手に向ふた嶺玄蕃、野中勘解由の二人はホツと一息吐たのである……が遉に良心の呵責に撲れてか、双れも打物採つて腕に覺ある平素の手並には似ず、晴々しい活動は出來なかつたやうだ。殊に山田の後室が『我の怨靈は孫子の末代まで祟をなす』と喝破した斷末間の一言はズンと膽に徹したであらう。軈て六人の亡骸を一室に集め一個〳〵檢視せば、這は亦た怖ろしの人の形相かな、死せる菊姫御前の両眼は今に生けるもの、如く爛乎と輝いて居る、而して両の瞼には無念の涙すら累々と搖れ懸り居る。其れと見るや野中勘解由も

嶺玄蕃も幾多悔恨の色動く。急に佛陀の淨名を口々に唱へながら、交る〴〵亡軀に立ち寄つて成佛の永眠を參らせんとはす……なれど詮ない。何條に死の瞼を撫ぜ撫ずれども目を閉がぬ……で却々に恨長く人を白睨に似たる。之には一同畏怖だちて今更ら實驗に供ふ首級を擧げん勇氣も挫け、單に相圖の烽火のみ揚げたのである。

待ちに待つた氏貞方の一味徒黨は『ソレ烽火が揚がつた』と躍り上り白山城より鯨波作つて駈け降り來る。片時も早く此事を大方様に注進せんとて瀧口の屋形に早打を飛す。

元來、嶺玄蕃も、野中勘解由も多血多涙の人であつた。で

一刀両斷血を流すも、戰國の當時、宗像家の騷動を永遠に斷つ一の窮策であると思ひ誤り、命令のまゝ我知らず斯る大罪を冒したものゝ、偖て今となつて眼前に六人の無慙な亡骸を見るにつけ、殊に菊姫御前の眼光怖ろしく、亦た座ろ忘恩の涙を禁じ得ない。殊に大力無雙の菊姫御前が今宵脆くも討たれ給ふたは、今日此頃のお家騷動に病み羸かれて力なく〳〵痩せ衰へた痕すら見ゆる。噫、如何に天魔に魅られしにもせよ天に向つて唾した我々は宿世如何なる業の生であらうか、と爾く想一たび此處に到れば不敵の面魂ユラ〳〵と動いて亡骸の前に自から頭下る。切て罪障消滅の一にもと先づ姫と母君

との亡骸二個を同棺に納めて、御殿の裏山なる崖下の字原の辻と云ふ處に手厚く葬つた。之と同時に侍女四人も直ぐ其側に穴を穿ちて跡懇に屍を匿したのである。

山田の御殿に亂入した雜兵們は、我先きにと金銀財寶を掠め去る、其内ち表局の長床に掛けある一軸こそ、姫が好みて五十君與助と云へる畫工に描かせた山水畫。與助は雪舟の高弟で畫の名人。早に宗像家に抱にられて繪所を勤め、姫君の繪の師匠であつた。姫は此の山水畫を比なく愛せられ、常に長床に掛けて賞翫され居たが、今宵の大騷動に丸絹燈倒れ、火は不審議にも此の掛物に燃に移りて、姫の落命と共に、跡

を存めず灰燼となつて了ふたと云ふ。餘の寶物は何に一つ殘らず奪ひ去られたのであるが、今に山田の地藏寺に、涙の人の遺物として秘藏されあるは、姫が日暮花の姿を映し給ふた圓き鏡と、雨につけ風につけ徒然の餘り繪合して遊ばれた貝合の玩具あるばかり。さるにても圓鏡は月を象たもので、女の魂としてある。又た貝合は今こそ廢れ、昔は嫁入第一の調度に數へられたもの。由來貝合の貝は蛤に限らる。蛤は他の貝に合すも合ぬもの。卽ち貞女兩夫に見にずと云ふ義を現したものである。會まく此の二品が塵多き浮世から出現して當山の寶庫に納つたは決して偶然であるまいかと思はるゝ。

十　山田御殿の人魂

宗像四郎氏貞卿の生母照葉の方は伯父陶入道晴賢の威嚴を暈に着て、宗像領内の家人は殘らず威壓なし、何時ともなく幼君氏貞卿を宗像家第七十九代の大宮司職に任じ、先例に慣ふて一般に中納言卿と仰がせ、眼中人もなげに擧止につけ、是まで兎角邪魔物であつた山田の後室及び菊姫御前を始め、我黨ならぬ大奥附の侍女花尾局、小夜、三日月、小少將の四人、盡く討ち平げて了ふたので、先づ是れでこそ我君樣の天下萬々歲なれと謠ひ喜んだ。で瀧口の屋形に錦の幔幕を張つ

て管絃鼓箏に興を助け、春の夜の闌るをも知らず、榮華の夢に憧れたのであつた――やがて報ひ來らむ怨靈の祟、世にも怖ろしい非業の最期を遂ぐると、後日にぞハタと思ひ當りて今宵の歡樂こそ却々に忘られぬ思出の涙であつたらう。

人間萬事、一寸先きは暗の夜である。昨日は今日の昔し、未來の地獄も、現在の榮華に眩みて知るよしもない照葉の方は、我が思ふまゝに山田の御殿を顚覆し得たので、先づ一方は之で芽出度落着したと悅に入る。偖て此の後は氏續卿と千代松丸殿の征伐である。

前にも一寸と述べたが、より明白に話の筋の通るやう、今

少し此處で氏續卿及び千代松丸殿、其外か宗像家末代の關係を詳しく語りたい――抑も氏續卿は今より四百八年以前、卽ち後柏原天皇の永正二年に宗像大宮司家第七十六代を相續なし、在職單に一年間。隱居料としては宗像内僅に五十町だけを領し、餘の領地は甥の正氏卿に代と共に讓りた。正氏卿は在職實に四十二年間、此間に大奥の腹に產れたは菊姫御前唯だ一人。されば伯父氏續卿の子氏雄卿を養ふて姫に配はせ第七十八代の世嗣とした。然るに其後ち正氏卿も氏雄卿も故人となり、會ま大宮司職空位の折から、正氏卿妾腹の氏貞卿が横合から不意に名乘り出で、我物顏に宗像家を相續せんとし

た。乃で宗家の氏續卿が承知せず、氏雄卿の弟千代松丸殿に相續せしめんとて、此度の騒動を喚起したのであつた……が、あはれ氏續卿は敵方の勢力に壓迫されて宗像領内に居耐らず我子千代松丸殿すら放棄て逸早く豊前の彦山に出奔したのである。

氏貞方の參謀寺内治部丞は菊姫御前の殺害に亞で、一日も早く氏續卿を攻め亡ぼさんと日夜苦慮して居た。なれど名に負ふ彦山は他國の領分でもあり殊に昔より修驗道の山伏が大護摩を焚いて十字の繩床に結跏趺座なし、呵吒の勤行を遂げ澄した清淨無垢、殺生禁斷の靈山であれば容易に足を蹈み込

まれぬ。そのため本意ならずも空しく月日を送るうち、天文二十二年三月二十六日附を以て、長州の陶入道より彦山の座主御坊宛の封書と共に一札の軍令書が到達した。披ひて見れば、御坊宛の書狀を先づ彦山に持參あつて挨拶を遂げ、油斷なく押寄せて氏續を討ち取れとの嚴命であつた。

之より以前山田の古御殿跡に早や色々の不審議な事ばかり——荒れ廢れた御殿の一部が、風もないのに屋鳴りして女の泣き聲を聞いたと云ふ人もある。亦た御殿の泉水より流れ出る小川の石が血に染つたやう多く眞紅になつて居たと云ふ人もある。それかあらぬか復た雨そぼふる夜半の嵐につれて人

魂が青い火の尾を曳いてフワ〳〵宙に迷ふを見たと云ふ人すらあつた。否やそれどころか、氏續卿征伐の嚴命が下つた八日前、現に山田の後室及び花尾局の怨靈は歴然と赤城峠に現はれて、仇の嶺玄蕃を惱殺したのであつた。續いて嶺の一族は怨靈に祟られ數日を出ず死に絶にて了ふたのだ。

十一　土橋氏康の彦山攻め

矢叫び劒吼ゆる世の亂れにつれ、あはれ人情は紙よりも薄くなりて、古歌にある如く人の心には棹も及ばない。偖て茲に土橋越前守氏康と云ふ人が居た。此の人は宗像氏續卿の甥

であつて、宗像領の内二十五町を拜領し、宗像家の門閥であつたが、今は一家一族も或は病死なし、或は殺害され、或は出奔して、世に賴み寡い孤城落日の境涯。且つ巷の噂に由ると、近頃敵方にては、吾叔父氏續卿を征伐せんとて、專ら軍議中なりと云ふ。是ぞ他事ならで吾が身の上。軈て此次には吾首刎らるゝ番てあらう。されば此ま、手を拱いて敵に虐殺されやうより、寧そ他手を借らず吾手に叔父氏續卿を殺して二心なき武勳を樹て、降參するこそ子孫のために土橋家の武運長久なれと、肚に問ひ、肚に答へた氏康は、取るものも取敢ず單騎馬に鞭打ちて敵の白山城に伺候した。先づ降參の血

判起請文を差出して後ち、寺内治部丞に面會なし、奉公の實驗として討手の役を身自から申受け、彦山に駈け參じて伯父の氏續卿を攻め亡ぼさんと申出でた。

寺内治部丞は氏康の赤心を屹と見屆けて後ち、之を許す。同時に陶入道より彦山の座主御坊宛の書面を渡し、且つ軍略をも授けたのである。今即時に多勢の軍兵を驅り集めて急に彦山へ押し寄せんこと世上に聞へも穩かならで頗る策の得たものでない。此際少し氣を拔いて敵に油斷させ置き、小勢にて敵の不意を襲ふこそ妙計なれと、故らに空しく月日を送り、木の葉落ち散る木枯の吹くを待ちて、氏康は家臣數十人を引

きつれ彦山に駈け向ふたのである。

彦山は豊前第一の高山であつて葛折りなす山路峻しく、峰巒より溪谷にかけては木立深くて常闇をつくり、三千坊の山伏が振り鳴す鈴の音は不斷の霧を破つて木靈に響き、時ならず雲起り、風奔る。氏康は人知れぬやう雲を踏み、風を渉つて峰を攀ぢ、座主御坊に入つて陶入道の書面を出し、氏續卿の隱家を問ふ。何條に問へども〳〵知らずと答ふ。知らんものに案内乞はん由もなく、心あて山内を其處此處と隈なく探し廻るうち、一人の樵夫に出會ふた。其れとなく鳥目なご與へて、尋ぬる人の所在を他處ながら聞けば、开は玉屋谷の杉

坊に匿れ居たまふ齒を黑く染めたる貴人ならんと告ぐ。さらば案内賴むと嚮道させて谷間深く排け入る。或は巖角を鹿のやうに奔り、或は藤蔓を猿のやうに縋り、一たび足を躡み過まらんか千仞の谷底に眞倒さま、猪狼の餌とならん。喘に喘ぐ喉の喝を苔清水に潤し〳〵、漸次のことで玉屋谷に辿り出でた。來て見れば浮世に遠き山懷、千年外の老杉森々と生茂りて晝尙ほ暗い。此處雲蒸す杉林の內に在る八棟造の精舍こそ杉坊なれと指點されて、氏康は打ち頷きながら窃に微笑む。尙も地の理を樵夫に尋ねて其處此處に兵を伏せ、用意整ふや其れ家臣進擊と采配打ちふり、不意に起つて閧を揚げ、太刀

襖を作りて、正門より犇々と押寄せた。

十二　三千の寺院より撞出す鐘

彥山は嵯峨天皇の勅願所であつて、世世守護入らずの靈山であるのに、紛々たる浮世の塵は此處までも漲り來ることの可厭さや。さはれ、宗像氏續卿が隱れ居た玉屋谷と云ふは、昔は般若窟と云つて彥山の權現樣が摩伽陀國より如意寶珠と云ふ寶物を抱いて日本に渡り、此處の般若窟に納めたと云ふ彥山第一の靈場であつて、山內の靈仙谷と別處谷とを併せて彥山の三溪と號し、梵字巖、虛空巖、文珠巖、普賢巖等あつ

て、役行者が荒行した天の賦せる金城鐵壁は、縱し百萬の精甲を擧げて攻寄せたとて、匆々容易く山内には亂入されなかつたであらう。實に油斷ほど大敵は無い。一門の土橋氏康に不意打されて早や杉坊の正門を打ち破られ大書院にまで吶喊されたのだ。

時しも家續卿は杉坊の山莊にて冬枯の山の眺めを賞翫しながら、浮世を他處に心靜けく坊の主人と碁を圍んで居たが、卒に起る打太刀の烈しき響、偖はと思ふ隙もなく、早や仇は間近くまで押寄せたりと聞き、驚きながら太刀掛けの佩刀急ぎ採り上げて駈け出んとした……を坊の主人に遮られ、今ま

此處で斬死したとて何の益が有らう。匹夫の勇に逸るは大將の擧止で無い。疾く〳〵落ち給へと諫められ、足袋裸足のまゝ奥庭傳ひ、裏手の潛戸から脫れ出でた。後前見廻し、落行くこと數百步、ホツと一息吐かんとする折柄。左右の木立より亦も鬨を揚げて伏勢が頓に群り起りたのである。見る〳〵うちに氏續卿を犇々と包圍み、四方より烈しく斬つて蒐る。卿も今は白刃を拔き翳して渡り合い、立ろに四五人を斬り斃した。で一條の血路開けたゆへ、脫兎の如く身を躍らして、竹藪の內に遁げ入つた。

之より先き、氏康は杉坊の裏手に方つて木靈に響く鬨を聞

き、偖はと逸早く駈け附けたのである。其れと見るや、此處に彼處に、逐ひ蒐け、逐ひ窮むる。會ま大衆三千の寺院より撞き出す鐘の音は轟々と滿山に響き亘る。這は是れ山伏達が靈山に仇ある不淨を拂はんとて、護摩堂に入るに先だち、相戒むるの警鐘である。氏續卿は此聲援を得て大に力を得た。偖しや亦た山法師等が我の爲めに荒れ出ではせぬかと勇氣は百倍し、獨り踏み止つて奮戰したが、あはれ竹藪に逃げ込んだが運の盡き、密竹林立して白刃を自由に打ち揮はれぬ、殊に老の身の動もせば竹株に躓き倒れんとする。加之ならず仇は卑怯にも矢襖をつくつて射蹙めんとするのである。

當日は空清く晴れ亘つて居たが、俄に一天搔き曇りて磨墨を流したらんやう大闇黑となり、時ならぬ旋風さへ吹き起り盆を覆す猛雨につれて、眉を燒く電奔り、電霆ゴロ〳〵と烈しく鳴り出でた。

氏續卿の家臣等は仇に不意打されて起ち遲れ、主君のため防戰する隙もなくて晩れ奔せ杉坊の裏手なる竹藪に駈け付けた。又た助勢の山法師等は甲斐〴〵しくも白裝束に金剛草鞋踏みしだいて、或は大身の薙刀、或は鐵輪入の角棒等を眞向に振り翳し我も〳〵と來援たが、噫、既に業に晩かりし。家續卿は重圍の中に陷りて全身血に塗れ、所詮助かるやうも見

になかつたのである。

十三　氏續卿立腹を切る

宗像氏續卿は仇の重圍に陷つて、今は却々に逃げも匿れもせぬ。武運拙く人生の定命も早や是までなりと觀じてか自から矢面に起ちて全身血を浴びながら近寄る奴們は片ツ端から蹴殺し、又は斬殺した。燒太刀の目釘續かん限り奮闘に奮闘して後ち、大雷雨の下、猛然として立腹を切り、大往生を遂げ給ふた、其の形相の怖さ、目も覺むるばかりであつた。實に文久二十二年癸丑十二月二十日の緯。

噫、天道は是か非か、善人亡び、惡人榮ゆ、世は逆事なりとて、遲れ奔せに駈けつけた輩も世を怨み、人を恨みて、我から憤死したのが多かつた……が今に見よ〳〵、甥として伯父を殺した討手の大將土橋氏康が晩年の斷末間を。見るも忌々しい天狗のやうに顏痩せ、眼尖りて、是まで弓を彎いたり、太刀持つた手は、あはれ筋引き吊て動ずなり、會ま氏續卿が十三回忌の當年に、世にも非業の慘死を遂げたこと、這は是れ後日の因果物語りである。

實に怖るべきは天神、地祇、人靈の恚りである。氏續卿の生害せられた當日は俄の大雷雨で彥山が震動したと云ふ。固

より高山の氣象は變り易い、殊に荒れ易い冬枯の空でもあつたとは云へ、天も地も人も燒ん許りの火柱が幾條となく爛れ立ち、激しく鳴り動めく雷霆は山の遠近に墜落て大木を裂き巨巖を碎いたは、豈も平事ではなかつたらう。寺院の祈禱の鐘に撞き出された現象か、左なくば靈山の權現樣が荒れ給ひしか、其れとも又た山田の後室其他の怨靈が祟をなしたのではあるまいかと、遉の氏康も膽を寒ふしたのであらう。で匆皇に下山して麓路に差し掛る頃には、さしもの大雷雨も餘波なく晴れ亘りて痕もなく、紺青の空美しき雲透より日光さへチラ〳〵と射す。濁流滔々と漲り流るゝ彥山川の畔を行くう

ち、徑に當つて行倒れの死人がある。屹と見れば、思ひきや嚮に東道した樵夫が落雷に震れて手足も黑焦になり悶死して居たのであつた。是れには轉た慄然としたであらう。併し亂世の武士氣質として今更ら之しきに戰慄くことであらう、と身自から勇氣を鼓吹ち、晝夜兼行で筑前宗像の白山城に歸參し、氏續征伐の一伍一什を言上した。

氏貞方の參謀寺內治部丞秀里は土橋氏康の凱旋を聞いて喜ぶこと一方で無い。早速に主君氏貞卿に請ふて氏續卿の舊領五十町を賞典として下し賜ふた。

根を斷ち、幹を倒し、葉を枯らさずば宗像大宮司家第七十

九代氏貞卿の天下は安泰なりとは謳歌されぬ。其れにつけ殘る殃の種子とも云ふべきは、鞍手郡沼口の片山里に潜み匿るゝ彼の千代松丸一人である。固より大擧して攻め寄するほどの剛敵でもなければ、寺内治部丞は腹心の徒黨に追手の下知を傳へて、沼口にと駈け向はした。

千代松丸殿の生母辨の前は、氏續卿が彦山で生害せられたことを早や知つて居たゆへ、今は追手の我若君に向ひ來るであらうと悟り、當年三歳になる千代松丸殿を抱いて人知れぬやう沼口の屋形を脱れ出で、何方ともなく姿を晦したのである。斯くと知らぬ追手の徒黨は、沼口に駈け向つて、窃に屋

形の内を窺へば、早や風を喰ツて逃げ亡せた後。なれど餘も遠くには未だ落ち延びまじ、草を排けてもと、人手を八方に別ち、只管に行衛を搜索中、誰れ云ふことなく、年幼き麻呂を抱ける貴婦人が若宮の方を指して落ち行く姿を見たと云ふに追手の銘々は此の方面に蟻の如く集りた——あはれ千代松丸殿母子の定命も今は刻一刻と縮り來つて、磐上を奔る玉よりも危ない。

十四　千代松丸を田樂刺

天文二十二年は改まりて二十三年の春を迎へ、四方の山邊

は霞渡りて花笑ひ鳥歌ふ。時の天下は將軍足利義輝公の治世であつたが、世は兵馬の塵に塡もれて、人の首を切ること大根の頭を落すよりも易い。人の心は荒みに荒みて虎狼に齊しく血を見ざれば息ない。されば空吹く風さへも何となく血腥い心地がする。

あはれ濁世の腥風に吹き捲くられて、天涯地角、身の置きどころすら無い千代松丸殿と生母辨の前は、身を小く縮めて早駕に乘り、二三の乳人侍女等に册かれて漸くに山口村まで落ち延びたが、軈て百姓共の注進に、追手は早や後方より追ひ來ると聞き、女心の胸狹く喃々と泣き沈む。供の人達も心

騷ぎて四邊キヨロ〳〵屹と回視せば、果せるかな、追手の者と覺しき人々の氣息喘々て此方へと駈け來る群集が歷々と見ゐる。最う斯うなつては主君よりも我身が大事。花も團子も命あつてのことである……と其れと云はねど目引き袖引き、主君の泣き臥す隙に、薄情にも後しら雲と、我先きに殘らず逃げ亡せて了ふた。

斯くとは知らず、辨の前は漸次に涙の顏を擡げて、フト四邊を見れば、這は何事ぞ、供の者は隻影だも居ずに、追手の輩が距離近く逼り來る。今は女々しく泣く塲合でない、固より殺さるゝ我身は露いとはねど、何條にも花の蕾の若君が殺

したくない。切て逃げらるゝだけは逃げ匿れんとて、可憐し可愛の千代松丸殿を懐に犇と抱いて、倒けつ轉びつ這ふやうにして山口村の内字うつれ木の畑と云ふ杜蔭に身を潜め匿したのである。

討手の悪人們は夫れと突き止め、此の里まで犇々と追ひ逼つたが、忽ち二人の姿を見失ふたので鵜の目鷹の目。何でも此處の木立に匿れたに相違ないと四方八方より杜の若葉を搔排て詮索する。

辨の前は愈よ絶體絶命、氣も狂はんばかりである。懐の麻呂を窃と覗けば出もせぬ乳房を餘念なく含みてニツコリ笑ふ

可憐さ。吁、死なんかな生きんかな、何時の間に亦た杜蔭より脱け出でたか、杜の側なる紅花の畑の中をトボ〳〵と逃げて行く。逃げ行く後姿を早くも目付けられ、仇は稲子の如くに飛び蒐り來る。右より左より眼前に白刃を突きつけて、懐の若君を此方に渡せよと犇めき逼る。なれど辨の前は泣きながら爭かな承知せぬ。

鬼に齊しい奴們は唇きも唇いたりな。『では是非なし、當方から母子の者に無間地獄の引導を渡すより術がない。其れでも强突張つて若君を渡さぬか』と敦圉く。が女の一念凝つては巖と化りて爭か動くべきぞ『我君ばかりは死んでも』と抱

き〆め、抱き〆めて泣く。何んぼ泣かれても鬼の眼には涙が無い。情け容赦もあらくれ男が土足を擧げてハタと蹴倒し猿臂を伸べて懷子を奪はんとする。駭いてワツと泣き出す千代松丸。今は辨の前も鬼女のやうになりて仇の手にパツクと咬みつく。咬みつかれて仇は怒の刄を肩先より斬り附けたが、それでも麻呂を手放さない。逃ぐる、逐ふ、奔る、倒るゝ、斬る、叫ぶ。紅花の畠の内を右往左往に環舞して、血は一面に畠地に流れ、未だ咲き亂れぬ紅花の蕾は散々に蹂躙られて韓紅に染め化さる。あはれ千代松丸殿も果は仇の手に渡て田樂刺に刺し殺されたので、眼前に之を見た辨の前は地團駄ふん

で口惜がつた。全身は仇の亂刄を浴びて鮮血淋漓。唇は耳まで裂けて火焔吐く鬼女の如き形相となり、踉蹌ながら突起ち上る、『うむ、此の鬱憤は死でも忘れはせぬ。後世の思出に屹と見て居らう、紅花の白く花咲く間は、我の怨み永遠に消にやらぬぞツ』と此處怨の一言を遺言として、麻呂と共に上萬も紅花の畠を紅蓮の臺と往生したのである——それかあらぬか今に宗像地方では紅花を太く忌み怖れて、代々植にない家があるそうだ。

十五　怪談の黑幕切つて落さる

殘忍非道は亂世の慣こは云へ、あはれ涙の淵に浮沈みせる宗像大宮司家の女房童子老人まで克うも〳〵無慘しく鏖にしたものではある。山田の月に怨恨を印めた菊姫御前母子諸共に侍女四人。次で彦山の大雷雨に立腹切つた氏續卿。討止にうつれ木の畠の紅花を韓紅に染め化した千代松丸殿母子の殺害。一人殘らず詐撃して眼もあてられぬ殘忍を極め、非道を盡した血の雨は、聞く者誰か斷腸の想に沈まぬ者があらう。噫、今の世に思ひ出でても眉昂り拳吼ゆる。況や當時弄殺された數奇薄命の人々の嘸や無念であつたらう。嘸や口惜かつたであらう、果して現つ世に人の生靈又死靈と云ふものあるとせば、之が怨まずに居られやうか。之が祟らずに濟まされやうか。此處九人の魂魄が年久しく宙に迷ふて成佛し得なかつたと云ふも嘘であるまいと思はるゝ。其内ち、山田の後室及菊姫御前と侍女花尾局、小夜、三日月、小少將の六人が怨府の主人公となり、之が影武者として氏續卿、千代松丸殿、辨の前三人が纒綿り、是までの鬱憤晴し安念晴しに三十四年間、怨靈の姿を交る〴〵現して仇せる家々に祟なし、思ふがまゝ、荒れに荒れて片ツ端から誰れ彼れなく喰殺し惱殺した怪談の黑幕はサー是から愈よ切つて落さるゝのである。

* * * * * * * *

天文二十一年三月二十三夜の月は皎々として山田の御殿を照して居る。礎は搖ぎ、軒は傾き、蔀は朽ち、簾は破れて座内に草茫々と生へ、相馬の古御所も斯くやとばかり思はるゝ。折から奥の佛間で誰ぞ珠數爪操りながら經を讀む聲が聞ゐる其聲は斷續で十萬億土の奈落より通ひ來るほどに遠い。近く『キャッ』と魂消る女の金切り聲。看經の聲ハタと止つた。すると佛壇の鈴が『チーン』と鳴つて、燈明の穗影が急に明るくなる。此時、何處かで亦た誰か『ゲラ〳〵』と皺枯れ聲で笑ふた。程もなく几帳の蔭より何だか白い姿が烟の如く朦朧ごして二つ現れたのである。眉を縮めて屹と見れば、あな怖ろし

や山田の後室と花尾局。續いて血腥い魔風につれ菊姫御前、小夜、三日月、小少將が怨の亡靈は其處此處にと現はれ出づる、何れも總身より生血をポト〳〵と座内に滴り落す物凄さ。軈て薄のやうな細い〳〵手を伸して手招きする。會ま表局の丸絹燈は人も居ぬのにフワ〳〵と宙を歩み出で、忽ち倒れ、灯は床の山水畫に燃ゐ移り、見る〳〵うち紅の舌ペロ〳〵と蛇の這ひ出てゝ人の足に捲き附かんとする——野中勘解由は邯鄲の枕を蹴つて瓦破と跳ね起きた。急ぎ太刀掛に手を掛けて屹と四邊を見廻し見廻せども……。

勘解由は少時茫然として自ら失ふたのである。全身冷水を

浴びたらんやう齒の根ガチ〳〵戰き戰く。なれど何一つ眼に遮る物とては無い。吾身は榮花の書齋に在つて、瀧坪ある庭の夏木立に鳴く蟬時雨を聞くばかり。で漸次に我に返り、騷ぐ胸元を撫で下したが、何條にも夏の日の假寢の夢物語とは思はれなかつた。過ぎし二十三夜、山田の御殿に亂入した當夜の光景が夢ならぬ現つ幻の心の鏡に歷々と映る。山田の後室が怨の一言は今に耳朶の底に殘つて消えやらぬ。菊姫御前が死靈の活ける眼光は今に眼前爛々と閃いてならない。現に同志の嶺玄蕃は早や惱殺されて了たのである。嗚呼其れや是れ思へば〳〵膽寒くなりてブル〳〵胴震を禁じ得ない。

由來、分を忘れて富貴に驕る人如何に、道に背いて榮達に醉ふ人如何に、あはれ風前の虹を捉へて黃金の梯しと謠ふに同じい。勘解由は一たび惡夢に襲はれてより亦た大熱を發し、富貴も榮達も忽ち風前の虹と消へ、身は熱病に罹婁れて『嗚呼苦しい〳〵』と叫び續けに變死した。それから七日と經ぬうち、家族七人とも齊しく枕を併べて變死したのである。取り殘されたは少に嫡子新右衛門夫婦と娘のみ、因果は覿面、之を見た新右衛門の妻た貞は良人の死を見送りて後ち、末の世怖ろしさに剃髮して妙德と號し、一生を佛の袖に縋つて、亡き人々の菩提を跡懇に弔ふたと云ふ。

十六　鬼一口に母御前を喫殺す

人、吾に非道ければ、吾、亦た人に非道いのである。山田の後室及菊姫御前、其他四人の侍女が怨の亡魂は實に天文二十二年三月より荒れ始め、第一の封切に血祭られたは嶺玄蕃、第二の鎗玉に擧げられたは野中勘解由、崇は啻に當の本人ばかりで無い、僅々數日のうち一家一族擧て將棋倒しにバタバタと惱殺された物凄さ。宛然で燒火箸もて人の咽喉を抉るばかり、待て少時の隙も無かつたのである。されば宗像領内の諸人は何れも膽を寒うして戰慄り、偖も怖しい怨靈の崇では

あると、口々に南無阿彌陀佛を唱へぬ者とて殆んど無い。暮六つの鐘がゴーンと鳴ると、女童は早や一足だも屋外には踏み出し得ぬ。日が暮るゝ、直に門口の戸を堅く閉ぢて了ふ。就中け山田の御殿に仇せる一門は雜兵の末までも、既に生きて居る心地がせぬ。毛を吹いたほどの塵芥一つ眼に入つても早や怨靈に祟られて盲目となるではあるまいかと危ぶみ、假初にも風邪の心地でもせば愈よ惱殺さるゝのだらうと歎く。サー斯うなると一犬虚を吠て萬犬實を傳ふ。今日は何處〳〵で怨靈に出遇ふたと云ふ人あれば、否や〳〵昨日も一昨日もと相槌を打つものがある。小笹を渡る曉の風、檐に時雨るゝ

夜半の雨、それすら怨霊の聲と誤られ。深山の櫻、野邊の尾花、雲の斷れ、烟の末までも怨霊の姿と疑はる。見るもの聞くもの一として怨霊の祟ならざるものは無い。斯くも怖ろしい怨霊の生々しい屍が埋めある山田の御殿には其れゆへ誰一人だも近寄り人が無い。近寄り處か御殿から流れ出るいさゝ小川の潺湲にすら、指一本でも指す人無かつたほどである。領内の人々は寄ると觸ると怨霊の祟話。其處でも此處でも一時は怨霊で眼を突くやうであつた……が現に亦た宗像領の内でも山田の御殿に仇した一族に限り、凶事多くて不吉の事が家に絶になかつた。或は狂人となり、或は癲人となり、又は

熱病に惱まされ、又は勞咳に苦めらるゝ等、痛切に生血を啜はれて、自ら變死する者が頗る多かつた。で愈よ土民は一般に身の毛を戰慄て、果は陰口叩くさへ罰が當ると一切口を噤みて了ふ。怨霊の話はハタと火の消たやう……。

年の瀨と、水の流や關守なく、天文は二十三年にて終り、弘治は三年にて改め、歴代は早や永祿二年の春を迎へた。氏貞卿の生母照葉の方は、今は我君中納言卿の天下となりて御大方樣と一般に仰がれ奉り、何に一つ心にかゝる雲とてなく、玄海晴がしたやうで顔の色まで何時になく若々しく見ゆる。女性ながら男々しき質とて怨霊の噂などには耳だも傾けぬ。

世は兎角面白おかしく月雪花の風流に若くものぞなしと、瀧口の屋形にあつて中納言氏貞卿の御妹菊花媛を相手に、春の日永を短しと、樂しく遊び暮す。

瀧口と云ふところは、宗像郡多禮村の内にあつて、後方には峰巒峨々として聳へ、白雲のやうに櫻の花の咲き亂るゝ斷崖には小皷の瀧懸りて天然の調床しく。亦た前方は一面に青田を見晴して霞む末は海に連り、眞帆片帆の眺めつきせぬ風景絶佳の勝地であつた。

御大方樣は此處繪も詩も及び難からんほどの瀧口の春色を眺めながら、今日も媛君と相對して、他愛なく双六を打たせ

給ふ。勝負は固より時の運と云へ、御大方樣の十二の駒は駈足早く媛君の陣中に吶喊る、で媛は頗る苦戰である。なれど始のうちは嬉々として笑ひ興じ居たものゝ、竹筒より振り出す二箇の賽の目は少しも思はしからで、双六盤上の媛の駒は足並支度路、敗戰である。之に赫と逆上たまふたか、見る〳〵うち菊花媛の血相變りてスツクと起上り、髪を蓬ろに、眼を怒らして、キリ〳〵と齒を切み鳴す隙もなく、飛鳥の如く身を躍らして御大方樣の咽喉に鬼一口ワングリ喰附たのである。

十七　瀧口の館に怨靈現る

嗚呼、九州は廣しと云へど、否や九州は愚か、日本六十四州を跨にかけても人の子として母の咽喉に喰ひ附き、恩愛の生血を、怨の甘露として啜る等、此んな椿事が亦と世に例あるものだらうか、午頭馬頭の地獄の沙汰にも劣りた極道の末と云はねばなるまい、さはれ自分で作つた罪惡は、自分で罪滅せねばならぬ。時維れ永祿二年三月二十三日、山田の怨靈はいよ〳〵瀧口の屋形を不意擊したのであつた。

照葉の方は駭くこと大方でない。吾が生みの菊花媛に咽喉を不意に喰い附かれ、魂消る聲を揚げて鬼女を附放さんとすれば、するほどに媛は只管に暴れ狂ひて夜叉のやうになりす

まし、血含む齒咬を彌や深く咽喉に喰ひ入らする。爭か怨の喉佛を喰ひ斷らで息むべきぞと焦心ち、母御前の生肉をゴリ〳〵と咬み味ふ。血は滾々として泉の如く流れ迸るを、舌皷にうけて蛇の如く啜る物凄さ何にか例へん。侍女等は逸早く駈け寄つたが、餘りの怖ろしさに、唯だ仰天して恟々と泣き騷ぐばかり、途方に暮れて爲す術を知らない。照葉の方も今は必死である。苦しき息氣の下、嗚咽〳〵聲で泣きながら、媛の髻をムヅと摑んで懲し罵る。其内ち老女の局達駈け出で來り、狂亂の媛を見て、背後より抱き附いた。尙ほ手取り足取りて、振袖の斷るゝまで、色裾の裂くるまで手强く爭ふた

が、それでも矢張り母御前の喉に喰下つた齒嚙を放さない。會ま氣轉の利いた女房が居て、這は所詮力業では叶じと觀じ、後方より媛の脇下にソツと手を入れ擽りたのである。之には遉に耐りかねたか、媛は思はず大口あけてカラ〳〵と打笑ふた。此の隙に辛じて鬼女の牙を脫れ得た照葉の方は、血スタ〳〵と滴る吾喉を押へ〳〵這々の體にて逃げ出す。媛は其れと見るや、眦を裂き、座を蹴立て、逐ツ蒐る。开を老女や侍女等が前後より立ち塞り、足縛れとなりて距離を隔絕たので、媛は左も口悔しさうに益す暴れ猛るばかり。双六盤を投げ倒し、香筥を蹴散らかし、几帳を踏み挫き、繪障子を叩き破り

愈よ狂亂の姿となつて繧繝縁の疊の上を渦卷く如くに駈け旋る。されば誰一人だも薄氣味惡がつて近寄り人が無い。

兎角するうち、媛はバツタリ倒れて息絕にて了ふた。奥女中達は夢に夢見たやうで呆れながら水よ藥よと犇めき騷ぐ、程もなく媛は再び息氣ホツと吹き返したのである。忽ち蓬なす黑髪を大童に振り亂して、座の眞中にスツクと起ち上る。血に染む齒の根をガチ〳〵と戰かしながら如何にも怨めしさうな金切聲ふりしぼりて泣く『吾を誰とか思ふ、山田の後室が怨靈であるぞ。忘れもせぬ年こそ變はれ今月今日、吾が寵愛の菊姫を殺した因果は覿面、今ぞ思ひ知つたであらう。爭

か怨の生血を啜はいで置かうかや。一門一家遠からず鏖しにして呉る、。此處の屋形も三年經ぬうち、萱薄の野原にして見する』と喚き叫ぶ怨靈の音聲は、轟く霆よりも怖ろしく瀧口の屋形を震動せしめたのであつた。

佛家の謂ゆる因果應報は爭はれないもの。嚮に山田の御殿で照葉の方に詐擊されたのも菊姫御前、今ま亦た瀧口の屋形で不意に照葉の方が咽喉に喰ひついたも同じ名の菊花媛。斯く仇味方二人の姫の名が遇然にも同じであつて、仇の媛君に會ま山田の後室が怨靈の乘り移りて祟をなし、吾が姫の怨を報ふたといふも是亦た宿世怪しき約束ごとであつたらう。

十八　此鬱憤を晴さいて置うか

虹梁鴛瓦の甃清き瀧口の屋形で人と爲つた菊花媛は、兄氏貞卿より年齢僅に一つ若くて今玆漸く十三の春を迎へたばかり。自然に生れつきて玉の顏、花の姿、似たも似たか、九州一の美の女神さまで謠はれた彼の山田の菊姫御前と瓜二つ。其れも其の筈、生母こそ違へ血脈は同じ王族の宗像大宮司職第七十七代正氏卿の落胤、で末代にも亦た有るまじきほどの美女であつた。されば生母照葉の方が天下に誇りとせる秘藏のお寶であつたのに、思ひきやそのお寶に火が附いて俄に噴火

山となり大爆發したので、瀧口の屋形では下を上との大混亂。先づ何は措き、此の椿事を主君氏貞卿に注進せんとて早打を飛すもあれば、否や其れよりも御大方様の傷口心掛なりとて御典醫の役宅に駈け附けるもある、又た一方には暴れ狂ふ媛の怨靈を鎭壓んとて大奥附の侍等は表書院に駈け附くる。其内ち無明齋大和と云へる者、腰に正宗の名劍を佩んで居たが、斯る物の氣は名劍の光を見れば立ろに鎭靜とてキラリ拔き放ち、媛の眼前に振り閃かす。怨靈は之を見てカラ〳〵と笑ふた。『其の刀は名劍なれど鋒に刄が無い。刄なければ名劍とても竹光に齊しい。其んな物を怖るゝ後室では無い。無禮者奴、

蠢爾して居ると其方も喰ひ殺すぞッ』と怖ろしい血相でハッタと睨めつけ、今にも飛び蒐つて亦た咽喉に喰附んず氣色。無明齋は此一言に辟易なし、早や戰慄つて一目散に逃げ出す。折しも、氏貞卿は駭いて採るものも取り敢ず、蔦が嶽の本丸より汗馬に鞭打つて一散に瀧口の屋形にと駈け附けたのである。來て見れば、果せるかな座内の其處此處に生々しい血汐が點々と滴り迸ツてる、其痕は腥く未だ乾いて居ない。妹菊花媛に咽喉喰ひ附かれたと云ふ生母照葉の方は後園の釣殿にて醫師良梅軒の應急手當を受け、胸より喉輪に掛け白布にて捲き立てられ、如何にも苦しさうに呻吟て居る。亦た表書

院に來て見れば、怨靈の乘り移りたと云ふ媛は、今しも暴れ勞れてか欄干に獨り凭れて、靑田の外處、白帆の風を孕みて海原を駈け行く景色を無心に眺め入る。で窃と立ち寄りて手を捉へんとすれば、媛は其れと覺り、顏色再び怖ろしくなりたのである『うむ、能くも來ました。ズンと云ひ聞かせる事がある。氏貞殿、性根を据へ耳朶を洗ふて屹と聞きませう。抑も吾れ山田の後室は殿の爲には何人であらう。又た山田の吾菊姫は殿のためには何である。豈も赤の他人ではあるまいがな。血脈續く義理ある大事の方樣ばかりであらう。其れに何事ぞ。浮世の義理人情に悖りて又を吾等に推すとは言語道

斷。嗚呼、何に怨あれば吾が山田の御殿を襲擊した。何に咎あれば吾ともに吾姫までも殺害せしめた。浮べる雲の富貴に心迷ふてか。現つ幻の榮花の夢に憧れたさか。苟も人の子として義理ある母人を殺し、姉を殺し、猶ほ飽足らで氏續卿、千代松丸殿、辨の前までも非道しう鏖にして、其れで枕を高く眠られやうと思うか。吾身を抓りて人の痛さを知れ。現在の生の母人が今ま眼前、苦痛の狀を何んと觀ずる。腸斷る許り無念とは思はぬか。無念の涙は吾とても同じと。吾の怨靈は殿の一代に祟をなし、此の鬱憤を晴さいで置かうかや』と唇咬ひ裂かんばかり怒り叫びて泣く。隙もあらば飛び蒐つ

て亦復氏貞卿の咽喉に喰ひ下らん血相見にて怖ろしや〳〵。

十九　宗像一圓は大伏魔殿

宗像中納言氏貞卿は令妹菊花媛が頓に現つ心なの人となつて奇々怪々ないこと口奔るのみか、眼の光さへ常ならぬ異形の様を見るにつけ、聞くにつけ、遉に胸躍り心穩かならぬ。偖は全く怨靈に魅られたのであらう……さるにても人もあらうに、撰に擇つて現在の吾妹に魅り、幽靈ならぬ怨靈の化身は、現然と先づ吾が垂乳根の母御前に喰ひ附き、尙ほ隙もあらば吾までも喰はんと呪ふ聲は、根もない夢の囈言とは何條

にも思はれ無い。呪の言の葉、今玆に一々思ひ廻せば、心の奥に張られある薄紙へピン〳〵と耳の皷膜から響いて來る心地がする。氏貞卿は潛然として涙を流しながら『偖も淺間しの御事かな。怨の數々は確に心魂に徹し申した。さはれ氏貞は當時未だ乳臭き幼少であつて、塵多き浮世の何事も存じ辨へず、去とて罪惡は固より身に脫れ難い、甘じて御怨の矢面に起ち申さう……』とは云へ、此處霎時し待れよ。若し吾の惱殺されなば、今日までも連綿として世々打續ける由緒ある宗像家も一朝にして煙と消ゆるを何にとかせん。其れや是れ思へば遉に命惜まるゝ。切てもの罪障消滅に名僧を招じて香華

を供け、宮司を聘して音樂を奏で、盛に大法會を營み、大祭典を行ふて神佛と崇め御跡懇ろに弔ひ申さん、あはれ尙くば享られよ。爾くて怨靈の祟は朝の露と消へ失せ給ひ、蓮華降る彌陀の淨土に浮ばせ給こそ願しけれ』と丹心罩めて切に愬ふ。怨靈の乘り移れる媛は开を空吹く風と聞き流しつ舌ペロリ唯だニタ〳〵と笑ふばかり。何時の間にか亦た欄干に凭れて他愛なくスヤ〳〵と眠入つて了ふた。

氏貞卿を始め、遲れ奔せに駈けつけた多くの家人も茫然として途方に暮るゝ。折しもあれ門外に人馬の足音物騷しく俄に聞ゆ。何事ならんと問へば『申上げます、只今、若子樣が

頓に狂亂せられ家に放火せんとて暴れ猛られまする』『申上げます、只今、親人樣が急病に罹られ、御危篤でござりまする』『申上げます、只今、奥樣が大熱に浮れて井戸に飛び込まれました』と悲報は頻々として來る。此處に列席せる家人の家族に凶事ありとて急飛脚の人馬は櫛の齒を曳く可であつた。

當日は丁度怨靈の七回忌に相當せる三月二十三日。偖こそ怨靈の主人公なる山田の後室が菊花媛に乘り移りて先登第一に瀧口の屋形を荒したのである。之を導火線に菊姫御前、花尾局、小夜、三日月、小少將の五人は、彼の三人の影武者と共に、其處此處、隱見出沒して怨靈の祟をなし宗像領内を震

動せしめたのであらう、と思へば〳〵轉た怖ろしくなり誰一人戦慄らぬ者こて無い。現に此日氏貞卿の家人の一族中、頓に無惨の死を遂げた者實に八十三人に達し、此外か照葉の方や、菊花媛のやう或は狂人こなり、或は不慮の重傷を被むつた者は殆んど其數を知らなかつたこ云ふ――嗚呼宗像一圓は今や大伏魔殿こ化つて了ふた。如何に世は亂離汚濁の末こ云へ、王族の嫡流たる氏貞卿の天下も愈よ燒が廻つて龜裂か入つたのである。サー是から鬼が出るか、蛇が出るか。大厦の將に倒れんこするを、宗像大宮司は何にを以て能く之を支ゆるであらう?。

二十　永祿より天正年間の筑前

天の覆ふこころ、地の載するこころ、時しも應仁の亂に次ぎて、九州大亂の最中であつた。で此の大亂と山田の怨靈とに渦卷れた此處宗像大宮司家の小天下を具さに物語らうこするには、先づ之が映ある背景こして、時の大天下の雲息氣から物語らねばならない。

起て日本六十餘州をズラリ見渡すならば、時の天地に風雲を蒸す大將株こ云つては薩摩に島津義久、肥前に龍造寺隆信、豐後に大友宗鱗、周防に陶晴賢、安藝に毛利元就、伊豫に河

野の一族、土佐に長曾我部元親、阿波に三好の一味、出雲に尼子義久、大和に松永彈正、河内に岩永主税、近江に佐々木の一黨、美濃に齋藤龍興、三河に德川家康、尾張に織田信長、伊勢に北畠倶敎、駿河に今川義元、甲斐に武田信玄、伊豆に北條氏康、安房に里見義弘、常陸に佐竹義重、越前に朝倉義景、越後に長尾謙信、能登に畠山の一派、加賀に富樫の一類、奥州に葦名成高。先づ此んなものであつた。

此等、大頭の大將株が四方を睥睨して鋒を研ぎ刄を磨く戰國の世に方り、筑前一國中、一鄕一庄の城主を誰々かと溫るなら、先づ宗像郡赤間の蔦ケ嶽に宗像中納言氏貞卿が居城して

居たを始とし、同許斐嶽の城には占部右馬之助尙安、又た御牧郡黑崎の花尾の城には麻生隆實、同上津役の城には麻生鎭里、同山鹿の城には麻生上總助元重、又た鞍手郡龍德の龍ケ嶽の城には杉權頭連漣、同永滿寺の鷹取の城には毛利鎭實、亦た夜須郡秋月の古所ケ嶽の城には秋月長門守文種、又た御笠郡天山の柴田の城には筑紫上野介惟門、同杉塚の和久當の城には上野加賀守、同牛頸の不動の城には奈良原兵庫之助、同竈門山の城には高橋鑑種、亦た粕屋郡立花の城には立花但馬守鑑載、同所白山の城には奴留湯融泉、又た那珂郡南面里の鷲ケ嶽の城には大津留彈正、又た早良郡入部の荒平の城には

小田部民部少輔、同曲淵の城には曲淵河内守信助、又た怡土郡高祖の城には原田彈正少弼種門、又た志摩郡草塲の柑子嶽の城には臼杵紹察、同小金丸の尾山の城には小金丸民部少輔良種と云ふ諸將が對峙して居た。此等の諸將は前に述べた天下の大將株が眼から見たら、固より勢力微々たるものであつたらう。併し筑前一國中では何れも一方の旗頭であつて、各所に出城を控へ、堂々たる大城主であつた。で此の大城主の下に尙ほ小城主として怡土郡吉井の城に吉井左京亮、同深江嶽の城に深江豊前守、同長石の城に西左京亮、同加布里の城に岩熊河内守、同有田の城に有田因幡守、同篠原の城には波

多江上總守鎭種、又た志摩郡志摩の城には古庄能登守、同元岡の城には元岡右衞門太夫、又た那珂郡不入道の猫峠の城には山田兵部丞、同白水の城には白水十郎左衞門、又た御笠郡天拜山の城には帆足備後守、又た上座郡白木嶽の城には白木玄蕃允、同寶珠山の城には森了心、同松尾の城には寶志山山城守、又た鞍手郡永滿寺の雲取の城には麻生鎭益と云ふ小豪が割據して居た——這は是れ永祿より天正年間に掛け、筑前に於ける武將の顏振である。斯く筑前一國中でも大豪小豪が綺羅星の如く連りて、思ひ〳〵に一城一廓を構へ、嚴然兵を養ひ馬を肥し、寸隙もあれかし、立ろに乘じて虎狼の慾を逞ふ

せんとし居たのである。

斯る累卵の天下に生れ出でた宗像中納言氏貞卿が當年の苦痛は果して如何であつたらう。白山の城より蔦が嶽の本城に移つたは實に永祿の三年であつたが、氏貞卿は今茲少に十五歳の身を以つて、右累卵の天下と戰ふばかりか、世にも怖ろしい怨靈の火の玉と、是から終始苦戰惡鬪せねばならない。

二十一　九州大亂と怨靈の祟

宗像中納言氏貞卿が神領の天下も九州大亂の渦中に捲き込れて領内に殆んど陣鐘、陣太鼓の音が絶へなかつた。其れと

云ふも當時宗像一圓が大伏魔殿であつて怨靈が大亂に魁入たか、大亂が怨靈を利用したか、双れにもせよ、大宮司家の礎は搖ぎに搖ぎ出したのである。

首を回らして過去にし跡を雲時し眺むれば、亦た血の涙の闌干として人の袂を露繁く撲つものがある——早や山田の怨靈は遠く周防の岩國までも飛火して怨み重なる陶入道の家に祟なしたと、時の人は目曳き袖曳いた。さしも中國に飛ぶ鳥落して眼中に敵を見ぬ入道も、あはれ天文の末年より屋形に凶事多くて、弘治元年十月一日、終に小敵毛利元就のため一擧して改め亡ぼされ、首を打斬られたのであつた。されば中

納言卿は一朝にして木から落ちたる猿猴同様、頓に親身の後楯を亡ふて孤立の身となつたのである――殃は是ればかりか、愈よ家に貧縁つて執念くも退散しない。時維れ弘治三年十月十日、領内に許斐三河守氏任と云ふ反逆人が忽然と現れ出でた。これぞ故宗像氏續卿の餘黨であつて、今では宗像家に有力な後楯が全く無く、又た當の主人中納言卿は幼君ゆへに伍みし易い。加之か氏任の一族で許斐左馬太夫氏備、許斐安藝守氏鏡と云ふが二人とも現に宗像家の執權職を勤めて居た、で之を抱ツ込んで大宮司家を攻め倒さんと企圖だのである、が遉に氏備も氏鏡も公私の別を明にして之に應ぜなかつ

た。それゆへ中納言卿は幸ひに寢首も搔かれず、又反逆の軍にも嬲ち得て、氏任の首を刎ねたが、一時は領内に敵味方の人馬亂れて、槍の雨降り、劒の風荒み、屍は積んで山を築き、血は流れて川を漲したのであつた――殃の黑雲は此許か未だ〳〵屋の棟を漂ふて居る。時は永祿二年九月廿五日、中納言卿は大友勢に不意擊せられ、既に命危きこころ、逸早く蔦が嶽の城を開き、辛ふじて虎口を脫れ、大嶋に遁竄したのであつた。討手の大將は粕屋郡立花の城主立花但馬守鑑載、同所白山の城主奴留湯融泉と太宰府の高橋鑑種を眞先として豐後の大友勢を後詰に引率れ、雲霞の如く大擧して先づ一息に宗像

領なる許斐の城を攻落したが、目指す本尊中納言卿が疾く大島に出奔したと聞き、一同は切齒をなして口惜がり、多くの兵船を驅り催して大島に犇々と攻め寄せた。此時とても島民が二心なく宗像家のため必死に克く防ぎ戰ふたはツかり、目に餘る大敵を追ツ攘ひ得て、中納言卿は九死の下に一生を繫ぎ得たとは云へ、幾次か双肌押し脱いで腹一文字に搔ツさばかんと危機一髮にまで逼つたのであつた。

あはれ中納言卿は、斯く國には殃絶へず、又た家には凶事多くて日夜心の安まる隙とてもなかつたが、性來豪邁の風あつて、謂ゆる將に將たる器量を備へて居たゆへ、能く殃に耐

へ、凶事を凌ぎて武運を開き得たのである。大島より再び宗像に渡りて敵を攘ひ、白山城より蔦ケ嶽の本丸に入城して以來、一方には城を修繕して敵に備へ、他の一方には怨靈を供養して人心を靜んと力めたのであつた。

二十二　現世からなる無間地獄

筑前宗像郡赤馬の庄、稜嚴寺の境内にあつた蔦ケ嶽の城は、宗像中納言氏貞卿が根城であつて、辰巳の方に大手を開き、東の口を門司口と呼ひ、北の口を石峠口と唱へ、天嶮に據つて地の利を占め、空濠を穿ち、逆茂木を植へ、外廓内廓とも

堅固に構へ、岳山の城と改名して、當國無双の名城であつた。それゆへ後ち天正十六年、太閤殿下が島津征伐のため筑紫下向の砌、當城を見て、早速に破壞せしめたのも、心窃に怖を抱いたからであらう。

斯る名城の主人公である中納言卿も、性來英邁の風あるに係はらず、遉に怨靈の祟は怖ろしかつたと見へる。且は隣國の外聞も憚り、何んとかして怨敵退散あらまほしやと、之より先き、家人に命じて早に山田御殿の裏山なる崖下の字原の辻に埋めある彼の六人のため名僧智識を招じ、自から施主となつて大法會を營みた。實にや皆人は六塵の境に迷ひ、六根

の罪を作るも、見ること聞くことに心迷へばなる。されば御經の法力に由つて五逆の達多は法性の眼を開き、八歳の龍女は南方無垢世界に生を受く。で此上は唯だ南無阿彌陀佛の御力に縋るより外なしと、山田の後室は增福院殿榮林妙秀大姉、菊姫御前は青松院殿心源妙安大姉、次で花尾局は春窓了月信女、三日月は清外智淨信女、小夜は妙相貞順信女、小少將は智覺了姓信女と其れ〳〵法名を謚りて、土饅頭の苔を拂ひ、新しく墓石を建立して香華を手向け、跡懇に弔ふたのであつた。

さはれ怨靈の祟は何條にも退散せぬ。山田の御殿より迷ひ

出る火の魂は今に消滅しない、此外か孔大寺山中の風穴の底で經讀む聲が聞へたり、又は白山城の櫓の石垣が雨も降らぬに頽れ落ちたり、又は千代松丸殿が殺された彼の鞍手郡山口村の内、今に『山の神杜』と云ふ古跡を殘すうつれ木の畑の杜には夜々子供の泣き聲が息まぬ等、怪しき事は數ず限りなかつた。其れのみか領内に悪疫流行て死ぬるもの夥たしい、で此の前途は如何に成り行くならんと、人々は薄氷を蹈むばかり戰々競々として居た。されば今は一日も棄て置かれずとて、中納言卿は先づ怨靈を神に齋き祭らんと、田島の里に神殿を新しく造營し、壯嚴に御靈移しを行ふて舞樂を奏で、氏八幡

と號し奉る。這は是れ八幡の宮は應神天皇にて御座し、慈悲無邊に勝れさせ給ひて放生會を事こし給へば、偖こそ荒れます怨靈の鎭靜やう慈悲の御袖に縋りたるなれ。又た氏八幡の氏は、宗像の氏媛を本尊こして尊び祭れるためであらう。

斯く一方には大法會を張り、他の一方には大祭典を行ふたが、それでも怨靈の怒を靜むることが出來なかつた。乃で中納言卿は山田の御殿より距離近き同じ山田村に寺院を建立なし、妙見山增福庵と號して怨靈の御菩提所と定め、六人の位牌を本堂に安置し、靈前に朝夕の香華供物料として田地二町を寄進せられた。この寄進狀は增福庵宛、永祿二年七月二十三

日中納言氏貞卿が親筆花押附の一札であつて、今に當山の寶庫に秘藏せられある。斯ほどまで中納言卿は丹心罩めて謝罪した爲めか、中納言卿御自身だけは、零時怨靈の祟を脱れ得たものゝ、一たび怨靈に魅られた肉親の妹菊花媛は、あはれ全く狂亂の人となり了つて終日埒もない言ばかり口奔り暴れ猛る。又た生母照葉の方は怨靈の姫に喰ひ附かれた咽喉の疵次第に腫れ上り、膿血流れ、喃な苦しやと悶ゑ泣く。されば中納言卿は氣が氣で無い。岳山の城より道程近からぬ瀧口の屋形に涙の二人を手放し置くは心危なしとて、城下の三郎丸村の内、川端と云ふ景色好き名區に新御殿を結構へ、此處に

二人を移して御典醫木道三官、良梅軒を日夜附き添へ介抱せしめたが詮がない。一人は苦しいとて泣く。一人は可笑いとて狂ふ。是ぞ現世からなる無間地獄。噫、怨靈の祟は當の大敵を蛇の生殺にジリ〳〵と惱め苦しますが、嘸や本懷であつたらう。

二十三　宗像大宮司家持城の地割

宗像中納言氏貞卿は幼君ながら、王族の嫡流として古今に辱しからぬ威嚴の自から備り、殊に思慮深い名將であつた。で一方には國内に怨靈の祟を鎭るため、山田御殿のあつた山

田村の增福庵を御菩提所となし、且つ鞍手郡山口村にも千代松丸殿母子の爲め、圓通院と云ふ寺院を建立し、千代松丸殿は林昌院春幻智生禪童子、辨の前は圓通院花屋貞顏禪定尼と云ふ法號まで謚りた。斯くて又た一方には國外の敵を防ぐべくため、岳山の城を本丸として、城下の赤城、城腰、草塲の三ケ所に關所を構へ、出丸としては、宗像家の開祖初代淸氏公の居城であつた片腋城、第七十七代正氏卿の白山城、第十五代氏平卿の許斐城、第十六代氏俊卿の草崎城、第三十六代氏國卿の勝浦岳城、第三十七代氏仲卿の吉田城、第七十七代正氏卿の名殘城を始め、手光村の古城を臨時番所と定め、宮

地岳城、蟻羽子城、高宮山城を定番所に當て、飯崇山城は中納言卿御陣所に畫め、此外か鞍手郡の宮永城、御牧郡の三吉城までも抱城として、其れ〳〵城番を置き、おさ〳〵露油斷てなかつたのである。

されば許斐氏任が反逆の兵亂に次で、粕屋郡立花城の敵軍が不意に起り、宗像領內に攻入つたが、高宮山の城當吉田源內左衛門出會ふて古賀原に奮戰なし、散々に敵を敗て武威を四隣に輝したので、爾來、中納言卿の神領を覬覦ふ者も一時中絕たのであつた……が怨靈の祟は威武にも屈せず、慰安にも靜らす、今も昔も變りが無い。

是ぞ正しく怨靈の呪であつたらう。岳山城の櫓下なる川端の新御殿に靜養せらる、照葉の方は秘藏の菊花媛が狂亂せるを氣病みて、終に餘病まで惹き起し、二人とも夜毎時を限つて苦しみ悶るのである。丁度怨靈の六人が山田御殿で殺害された時刻より草木も眠る丑滿つ時にかけ毎夜大熱を發して殆んど人事不省となる。母子ともに大熱に浮された時分は、虚空を摑んで苦みながら、怨靈の姿が現つ幻に眼前にでも繽紛やら、一切無我夢中『あゝ又た來た〳〵青白い顏して怨めし相に……』『あれ〳〵彼處に恐ろしい人がゐんで居る』等、甲奔つた聲は夜半の嵐それならで長局に物凄く響き渡る。そ

れかと思ふと夜が明れば、宛然で大風の凪いだ後のやう二人はがつかり勞れて生體もなく唯だスヤ〳〵と眠るばかり。

此の怖ろしい有樣を、朝晩見たり聞いたりして居た大奥附の女房達は誰も彼も戰慄る。女性ばかりか、御典醫木道三官と云ふは名を一德と呼ぶ名醫の唐人であつたが、百方秘術を盡しても詮が無く、怖ろしいのが先きに立つて、果は匕を投げ熱に浮れてお主と共に亦た狂出した。サー斯うなると宿衛の武士までも逃げ足となる。あはれ菊花媛母子二方とも活しもされず、殺しもされず永の年月日、怨靈の呪の手に摑れたま、翫弄物となり、散々に生血啜はれた末、最う用は無いと

小突き放され、終に照葉の方だけ無常の引導を渡されたので
あつた――崇は漸く中納言卿の御身に逼つて來た。
家臣の人々は日夜城内に詰切りて群議を凝す。或は巫に賴
み、或は山伏に乞ふて怨靈退散の加持祈禱をなし、只管に過
去にし罪を詫入れたが、それでも〳〵些の効驗だも無い。
當時、比叡山に目祐と云ふ名僧が居た。祈禱の名人として遠
近に評判高かつたので早速に此の名僧を請じて御祈禱を賴む
ことゝなつた――思ひきや却て此の御祈禱が仇となりて會ま
怨靈の怒を高め、旋風の吹き捲くるやう崇は彌や益す領内を
荒れ廻り、岳山の本丸を震動せしむるはサー愈よ是からだ。

二十四　墳土に偃せた平釜は粉微塵

比叡山の名僧目祐は王族宗像家よりの懇望に接し、筑紫に
下りて宗像に入る。先づ崇の一伍一什を聞いて駭くこと一方
でない。世には崇の數々あれど、斯くも怨靈の猛烈なるは類
例少ない、所詮尋常一樣の祈禱では靜まるまじ。唯茲に一の
秘法と云ふは、大形な平釜を鑄させて、暴れ猛る墓の上に打偃
せ、我が天台の秘密の法力を以て土中に深く封ずるより外な
しと云ふ。中納言卿を始め、家臣一同も、這は至極の方便な
りと賛成なし、早速に蘆屋の里の釜師を召し出し、黄金は所

望に任す程に丹精を凝して地金厚く堅牢なる大釜を三個鑄造せよと嚴命を下したのであつた。

釜師一同は氣にも留めず、れ受けしたのであつたが、御用の大釜鑄るうちに怪しき事が度々あつた。或は燒窯の火が急に燃ゑ上つて釜が龜裂たり、或は釜師が不慮の大火傷して臥床く者すらあつたので、亦た急に怖氣立ちて後の祟を思ひ遣り、觸らぬ神には祟あるまじと、百方口實を構へて辭退した者もあつた。なれど今更ら裁可のあらう筈もない。強て嚴命に悖らば、亦た如何なる重い罪科あらんも計り難く、力なく〳〵御諚のまゝ大形の平釜を三個鑄了たのである。

當時、怨靈の墓は山田の後室と、菊姫御前と、侍女四人を寄塚にしたものと三基しかなかつたそうだ。それゆへ怨靈は六人でも、祟を封ずる大釜は三個しか入用なかつたのだらう。

三個の大きな平釜は竣工た……が偖て今度は怨靈の墓を發いて此の平釜を打ち被するほどの勇氣ある者とては下民に一人も居ない。金でも挺でも動かばこそ、誰も彼も逡巡して逃げ匿るゝ。今は詮方なしと、家中の勇士を撰び募りて怨靈の墓を倒し、墳土を發いて、土中に大釜を偃せ、再び元の如く土を均らして墓石を建てたのである。

此處三個の大形な平釜を土中に偃せた墓所の靈前に祈禱の

壇は設けらる。十字の繩床を張り。採燈のため一尺八寸の壇木を高く積み重ねて大護摩を焚く。軈て名僧目祐は夜半に壇上に現はれ、秘密の九字を切り、印を結ぶや、堦かと結跏趺座して本覺眞如の念珠を揉み鳴し、陀羅尼經を讀み、祈念すること稍や久しい。忽ち突起ち上りて振鈴の響に耳を澄し、含識の流、流石に濁らず、空に華鬘を散らし、風に洒水を降らし、瑜珈三密の定に入る。此時採燈の護摩木炎々と燃ゑ上り、火の粉は紛々と亂れ飛んで名僧の法衣の袂を燒く。さはれ行ひ澄したる大道心は小搖ぎもせぬ。之を見る者、聞く者賴母しき事に思ひ、是でこそ怨敵も退散したるなれと、ホツ

と一息吐いたも束の間。曉かけての大雷雨、天の柱は折れ、地の軸は裂けんばかり乾坤震動し亘る。昔し大蛇の棲んで居たてふ孔大寺山の風穴からは俄に旋風吹き起り、家を倒し、人蓄を傷つく。今にも亦た山海嘯の漲り來らんかと思ふほどに雨烈しい。殆んど一晝一夜は常暗の奈落に陷つて物の黑白も分らなかつたが、兎角するうち空は拭ふ如くカラリと晴れた。只視れば、這は何事か、言語道斷である。怨靈の墓石は倒れ、墳土は發かれ、土中に偃せた平釜の三つは粉微塵に碎けて四邊に散亂して居る。宛から噴火山でも大破裂した有樣が見ゆる、之には遉の名僧も思はず舌を卷いて呆れ、今は吾

が法力も及ばずして匆々に歸山して了ふた。さるにても怨靈の憤怒の鼻息氣荒々しや。當時粉碎された蘆屋釜の破片は今に山田地藏守の御菩提所に寶物の一として秘藏されあるが、錆び朽ちた鐵の底には未だ怨靈の祟の宿り居らずやと、思へば何んとなう薄氣味惡く、鬼氣人に逼るやうな心地がする。

二十五　赤間表の大合戰

宗像中納言氏貞卿は身の丈、人に勝れて隆く、殊に膂力世に秀でゝ强弓を彎き、又た文筆の嗜深く、謂ゆる文武兩道の達人であつたが、九州の大亂を一手に引受けんこと固より能

ふべき業でない。されば嚮に後楯の陶入道を亡ふてより、今では毛利元就の幕下に屬して西海の空に宗像の神領を保持し居たものゝ、あはれ怨靈に一たび魅られてより、世を換へ、生を移しても嗔念悶々の白羽は、宗像大宮司家の屋の棟に羽ぶくろ迫て箆深く刺り、何條にも化脫しない。之には遁の中納言卿も殆んど閉口して居た。併し武將としては春秋僅に十六歲で、早く頭角を群雄に拔き、一代に沒すべからざる武勳の赫々たるものがある。

永祿三年八月十六日、大友宗麟の幕下筑前在城の諸將は不意に大軍を再擧して哄と鬨を揚げ、潮の漲るばかり岳山の

城に攻め寄せたのである。寄手の先陣は戸次丹後守鑑連、二陣は奴留湯入道融泉、三陣は立花但馬守鑑載、後詰には奴留湯主水、高橋三河守等が控へて居る。惣勢五千餘騎、金鑽の陣組、檀應雛感の軍配、雲霞の如くに湧く。

當時、逸早く城内に駈け集つた宗像家宗徒の銘々を誰々かと問へば、前年彦山で氏續卿を殺した土橋越前守氏康を筆頭として、寺内治部丞秀里、深田美作守氏俊、吉田伯耆守重致、寺内備後守尚秀、國分若狭守直頼、吉田和泉守秀時、石松加賀守秀兼、同對馬守尚宗們、軍兵二千五百餘と註せらる。軈て陣貝鳴り、攻鼓響くや、兩軍は赤間表に出會ひ火花を散し

て烈しく戦ふた。

中納言卿の抱城吉原の城將占部右馬助尚持の嫡子宮若丸と云ふは當年十五歳の若武者であつたが、伯父の重安、同貞安其他石松源兵衛、常世十右衛門等一騎當千の勇士等を引率れ、追手の城門を八文字に開き打つて出づ。續いて城將占部尚持も四百餘騎を將ゐて駈け出で、横側より立花勢に突進る、魚鱗に蒐り、鶴翼に開き、双方とも此處を先途と奮戦激闘し何時果つべきやうも見ねなかつた。其内ち討手の總大將立花鑑載は長尾原に駈け出でゝ占部尚持を圍み、先づ吉田城を乗取らんとする。又た後詰の高橋三河守は岳山城の羽翼を殺がん

ため、許斐城に攻寄せたが、矢門〳〵より矢襖を作つて城將占部甲斐守尙安克く防ぎ戰ふ。寄手は又た新手を入替〳〵て岳山の根城を落さんと犇めいたのである。敵も味方も三方に混亂れて追ひつ追はれつ修羅の鎬を削り、屍を越へ、血を渉りて、曳々と喚く聲は數十里の外にまでも聞ゆる。宗像前代未聞の大激戰であつたが、中納言卿が身自から陣頭に起ち、一次び金鼓を鼕々と鳴らして下知を傳ふれば、宗像勢は火も水も物かは、巴に旋り、卐に駈り、霹靂の枯木を劈く如く、さしも立花の大軍を四裂八載に打破つた。翌十七日敵は鬱憤晴しに再び大擧して吉原城に稻麻竹葦の如く攻め寄せたが、

之とても亦た散々に打ち破りて、勝軍の烽火は宗像の天半に爆々と轟したのである。

中納言卿は斯く國外の强敵に對しては祖先傳來の神領を寸も蹂躙らしめず、宗像家の歷史上一大特筆すべき武勳を樹てたが、獨り國內の怨靈に對しては、あはれ手の附けやうなく、齒の立てやうが無かつた——怨靈は蘆屋の平釜を偃せられてより一段に暴れ出で、ジワ〳〵と遠卷に中納言卿を惱すばかりか、晝となく夜となく、怨靈の姿は宗像領內を飛び迷ふ。で若し道行く人の怨靈の眼と眼を見合した者は、立ろに卽死したのであつた。

二十六　宗像家滅亡の前兆

實にや怪を語れば、怪來る。一夜、孔大寺山上に怪しき黑雲の簇々と湧出で、虛空に立昇るよと見たが、其形例ならぬ。始は人の彳む如き恣態であつたが、漸々に長く這ひ延びて大蛇の起臥つたやうになり、須臾あつて日傘を開きたらんほどの光明體と變じ、火の尾を爛々と曳いて西北の方へ掠め飛び、雲中に入つた。其の通過た跡は、宛から虹の如く碧丹く輝きて野山の草木まで鮮明に見ゆること小半時ばかり、那れよ〳〵と云ふうち、全く痕を止めず消え亡せて了ふたので

ある。

怪しき事は之ばかりで無い。山田御殿の裏山、字原の辻に建つ怨靈の墓の四邊は燃土のやう蹈めばボコ〳〵音がする。又た今に古跡を殘す白山城の水穴が急に鳴動して噴水する。又た先代正氏卿、氏雄卿が白山城に上下り毎、乘馬に水飼ふたと云ふ增福院前に城池の名ある山井の苔清水が白水と濁る。此外か蘆屋濱の沖題目。高宮山の山神樂。數へ立てせば轉た限りが無かつた。後日に思へば、其れも是も皆な宗像家滅亡の前兆ではなかつたらうか。

前兆は夢幻泡影の怪しき現象ばかりで無かつた。あはれ蘆

屋の名ある釜師は怨靈の墓に偃する平釜を鑄つた爲めに、齊しく亦た呪ひ祟られて子孫まで次第に死絶へ、筑前名物の一に數へられ居た元朝傳來の蘆屋釜も、終には泥牛の淵に沈みたるばかり釜師の後繼を絶つて了ふた。

斯く宗像領内に不吉不祥の事絶へやらぬので、世に武勇の譽あつた中納言氏貞卿は亦た一日とて胸の平かなる隙とて無かつた。されば、神社には幣帛を捧げ、佛閣には香華を手向け、名ある神佛には祭田を寄進してまで、日夜怠らず國家の祈願を凝らしたのである……が、惡趣の羈絆堅く結ばれて解けやらず。罪障の山は高く、生死の海は深し。怨靈の祟は

眞綿の針でジワ〳〵と喉輪を〆むるやうな氣がしてならぬ。何となう胸塞り氣鬱して潑溂した元氣が出ない。一つは精神自殺でもあつたらうが、日に增し病身になつて血枯れ、肉痩せ、意志の鎖沈するばかり。動もせば惡夢に襲はれて明暗の間に迷ふ。噫、爾てはならじ、吾ながら衰へたりと、時には大猛心を奮起して肥馬に跨り壯に大弓を彎き、又は白山の水穴に入り坐禪を組んで丹田に膽を練たのである。

時しも毛利大友兩家の確執は結んで解けやらず、九州大亂の焦點であつたが、永祿五年の夏、足利將軍義輝公よりの台命に由つて兩家の和睦芽出度調ふたのである。毛利家には聖

護院殿、大友家には久我殿諚使として下向し、双方とも永劫に和解すべき印象として、豐前刈田の松山城は毛利家より大友家に還附し、又た門司の城は大友家より毛利家に還附し、且つ大友家の息女を毛利幸鶴丸に輿入せしめ。先づ是で龍虎の大戦は息んだ。隨つて之が眷族の猪猿鹿や狐狸狼等の小爭も自然と亦た休んだのである。

二十七　毛利大友両家の筑前戰

時の將軍足利義輝公の仲裁にて、永祿五年の夏、毛利大友兩大家の葛藤漸く解け、一時は太平の御代を謠ふたが、此間

大友家の政道を喜ばぬ筑前在城の諸將は去つて毛利家に奔る者が多かつたので、復も天地震動するやうな九州大亂を再び惹起したのであつた。

永祿十年七月七日、筑前太宰府の高橋三河守鑑種は竈門の岩屋の城に楯籠つて大友家に背いた。是ぞ九州大亂の導火線であつて、各地に戰亂紛々と蜂起し、あはれ怨靈に惱める宗像大宮司家も終に此の渦波に捲き罩まれたのである。

九州探題の名ある豐後の大友宗麟は筑前領の總檢斷を命ぜる高橋三河守が款を毛利家に通じたと聞くや、大に憤り、筑前の猛將戸次丹後守、臼杵越中守、吉弘右近允を追討使こし

て竈門山に駈け向はした。が敵は名に負ふ當國一の天嶮に據つて、攻め上らんこせば、山上より不意に岩石を轉がし落し、寄手は日々に死人の山を築くばかり。されば所詮一息に攻め落さんこと思ひも寄らじ、兵糧攻にするより妙策なしと遠巻に包圍む。

折しも肥前の筑紫右馬助廣門が亦た毛利家に一味し三條の城に籠りて大友家に背く。宗麟は之を聞くや忌々しきことに思ひ、幕下の傑物齋藤鎭實に大兵を附して討手に向はしむ。筑紫右馬助は永祿十年七月十一日より二十六日まで息なしに揉み立てられて三條の城を攻落され、脱れて九箇山の城に入

つたが、終に矢折れ力盡きて降參した。

夜須郡秋月の城主秋月文實が亦た毛利家に加勢を賴みて、數千の精甲を率ゐ、竈門山の後詰として大友家に背いた。で竈門の寄手の大友勢は諸將列座軍議の末、竈門には吉岡三河守、齋藤兵部丞を大將として三萬の兵を止めて遠巻し、秋月には戸次、臼杵、吉弘の三將、身自から二萬餘騎を麾いて駈け向ふたのである。同年八月十四日より激戰となり、秋月文實は敗れて古所ケ嶽の山城に據る。寄手の戸次丹後は茄子町に陣取り、臼杵越中と吉弘右近とは庄山に旗幟を進め、古所ケ嶽城を包圍て左右より惣攻擊したが、攻め落されぬ。會ま

長州の毛利元就が竈門及び古所ケ嶽の後詰として攻め寄するこの風聞起つたので、大友宗麟は急に軍令を筑前の寄手に下して攻口を解拂ひ、隣國の筑後に引上げしめたのである。戸次丹後の率ゆる一軍は筑後の赤司に留り、吉弘右近、臼杵越中の指揮せる軍兵は同八十島に泊り、近郷近在の武者を驅り催し、再び筑前に攻入らんとて勢揃ひした。

戰塵濛々の間に歷代は新しく改まりて永祿十一年の春を迎ふ。同年四月、粕屋郡立花の城主立花但馬守鑑載も亦た大友家の政道を喜ばで毛利家に屬した……が戸次、臼杵、吉弘の三將が率ゆる大軍に不意打せられ、戰敗れて自殺す。されば立花城には城番として鶴原掃部、奴留湯主水の勇士を留め、寄手の三將は勢に乘じて立花城の殘黨衛藤尾張守、毛利家の加勢清水左近の兩軍と各處に轉戰して連勝を博す。此の威武に壓迫されてか古所ケ嶽の秋月文實も終に大友家に降參したが、竈門の高橋鑑種は强情にも一人踏止つて降らない。此時大友家は肥前の龍造寺隆信とも兵を釀したが、翌十二年に及びて戰亂解く。それゆへ高橋鑑種は急を毛利家に告て援兵を乞ふ切りである。是に於てか永祿十二年四月、毛利元就は吉川元春、同元長、小早川隆景、宍戸隆家を先鋒の大將として惣勢四萬五千餘騎を九州に出師す。遉の大友宗麟も大に駭き

豊後より出でて本陣を筑後の高良山に進め、親しく諸軍を統裁す、軍兵總じて三萬五千餘騎。多々羅の濱より香椎にかけ、小旗、大旆、東西に靡き、南北に亂れ、軍兵の雪頽を打つ。同五月五日未明より毛利大友兩大家の大合戦は始る。見渡す限り筑前一圓は曦影さへ見にぬまで空に土烟漲り、敵味方の混亂れて哄と揚る鬨の聲は百千萬の雷霆が轟き落るばかりであつた。

永祿十二年八月十日、宗像中納言氏貞卿は毛利家の後詰として飯盛山に本陣を進めた。御家の紋所『楢の折枝』又た大内義隆より拜領の紋『唐菱』の軍旗は山上に林の如く立ち、雲の

如く簇り、朝風に翩翻と飜につて居る。

二十八　怨靈の白羽亂れ飛ぶ

宗像大宮司家の紋所『楢の折枝』と『唐菱』とを白綾に染め出した軍旗は飯盛山の曉風に鳴搖て居る。由來、鼻祖清氏親王以來、菊桐の御紋が家の紋所であつたが、菊桐は一天萬乘の天皇の御紋章で畏れ多い。されば建武三年以來、宗像家中興の祖第五十四代氏俊卿より楢の折枝を定紋と改めたのである。之が緣起を溫ぬるなら、當年氏俊卿が九州沒落の足利尊氏のため菊池武敏と多々羅の濱に戰ふた砌、宗像勢が中食の握飯

五個づゝ楢の葉に盛りて喰ひ、奮戰して終に菊池勢を破り大勝利したので、之れが吉例に因みて楢の折枝を家の定紋とし

の實五個附着し居るは五個の握飯を印象たもの。現に山田地藏尊の紋所として、昔し宗像家が九州に樹てし武勳を世に謳ひつゝ今に增福院に殘存て居る。次ぎに唐菱の紋所は、本來大内家の定紋であつたのを、氏貞卿の實父たる宗像第七十七代正氏卿が會ま大内義隆の幕下に屬し、世々比類なき忠勤を抽出たので、特に拜領した代紋。

宗像家の紋所題た旗幟が飯盛山に飜るを見て、毛利家より軍監として三戸新兵衛と云ふ者來る。宗像勢は大友勢と出會ひ、矢軍より白兵戰となるや、軈て敵方より天晴れ武者振めでたき大將一騎現れ出でた。緋威の鎧を草摺長に着なし、同じ毛の鍬形打ちた五枚甲を猪首に戴き、熊の皮の毛鞘吊りたるが、紫の厚房附けた鹿毛の三歳駒に打跨る。やをら鞍坪に突起ち上りて大音聲『吾を誰とかする、打物採て筑前に名ある豪族奴留湯久則と云へる者。誰かある出會ふて見參せよ』と喚き叫ぶ。此時、宗像勢より駈け出でたるは大宮司家四天王の一人吉田守致、當年十八歳の若武者。身には藤繩目の大

鎧を投げ掛け、南蠻鐵の籠手脛當を着け、甲斐黑の駒に打ち乘る。音吐隆らかに名乘を揚げて角太刀を振翳し、斬つて蒐る。人の眉燒かんばかり打物烈しく石火を飛したが、勇將と勇士の顏合、双れも兎毛ほどの隙もない。鏡の裏の花、水の上の月、眼には視ゆれど手には採れない。エー面倒なりと双方とも打物ガラリ投げ棄て、大手を擴げて馬上にムンヅと組む。曳々と引きつ戻しつ揉合ふうち、兩馬の間に墮と落つ。下を上、上を下、蹴反し、跳反す機、狹き溝川に轉げ込んだが、久則は名ある强力者とて終に守致を取つて組み敷き、甲の錣折り疊んで、首搔き落さんと短刀閃かす。之より早く守

致は下より七首拔手も見せず久則が鎧の綿嚙引つ摑んで柄も貫れと三たび突刺した。颯と逆る血汐の兩眼に流れ入つたが、守致は毫も屈せず、瓦破と蹴起き、逸早く仇の首搔き落して血奔る目より高く差揚ぐる。此時まで鳴を靜めて見て居た敵も味方も思はず哄と聲を揚げて褒め稱やす。中納言卿は此機を逸せず馬上來配を打振て駈け旋る。宗像勢は愈よ勢附きて簸を叩き鬨を作つて驀進に攻め蒐る。遉の大友勢も眼前に勇將を亡ひ、見る〳〵浮足たちて亂次となり、右往左往に潰に奔る。毛利家よりの軍監三戸新兵衛は之を見て賞賛措かず、喃な天晴の戰相かな、此旨屹と披露仕らんとて飯盛山より小

早川隆景の陣所にと凱旋した。

爾く宗像勢は戰爭には大々的に勝つたが、之に反し宗像家には亦た徐ろ〳〵不吉が纏綿つて來た……と云ふは、會ま主家の毛利元就侯が長府の本陣より國許に内亂あればとて檄文を飛し、永祿十二年十月十五日霙玉散る夜半の闇黑に乘じ、大友勢に知れぬやう筑前より師を班げたのである。あはれ宗像家は賴む木蔭に雨漏りて軍氣頓に阻喪する。されば筑前は早や大友家の獨舞臺。十月十八日早天より大友家の戸次丹後、臼杵越中、吉弘左近の三將は雲霞の如く大軍を將ゐて岳山の城に押し寄せ、火水となつて吶喊したが、中納言卿は孤城に

嬰り、今は城を枕に戰死せんと猛戰して降らない。殊に城は名に負ふ當國一の名城であれば之には大友勢も殆と攻め惱みてか和議の取扱があつた。和議と云つても相引では無い。固より中納言卿が敗身である。偖て和議の箇條と云ッば(一)毛利家を去て大友家の幕下たる事。(一)宗像の神領、其一半を大友家に割き預る事。(一)岳山の城を早速に明け渡す事。

嗚呼怨靈の白羽は宗像の天に紛々と亂れ飛んで居る。右三箇條の内、其一つ承諾ありたしと大友方よりの申込であつた、が遺に中納言卿も之には嚴然として應じ得なかつた。で和議の條件は双方ともに歩み寄り、宗像神領の内、若宮と西郷の

兩庄だけ大友家に預け申す一條にて平和纏り、國亂を大島に避けて居た宗像の土民も漸々と歸參して領内は再び平穩に歸した……なれど既に神領の一角を失ふた中納言卿は轉た怏々として樂まぬ。思へば〳〵明暗の間に吾家を搖り動かす怨靈の姿の、寢は夢、覺めては現つ幻の境に來往して、消亡らぬ其苦しさよ。逐へど拂へど朦朧として眼前に歸去來する。

二十九　呪の手に吾身を遊ばんかな

偖も浮世か、風荒く、波高ふして、動もせば棹さす舟の櫂を折られ、帆を破られ、舟なる人は波の藻屑と溺れ沈まんかな。噫、怨靈の呪の手は世の海原に渦卷く風であらう、波であらう。其の怖ろしい風と波とに翫弄るゝ我家は櫂折れ帆破れた棄小舟ではあるまいか。會ま舟なる吾の溺れ死なんは、祟の苦痛を脱れ得て却々に本意なれど、吾の祖先が一たび九州に樹てし王族の名ある礎を、吾が七十九代にて水泡とせんこと何條にも得忍ばれない。飽までも怨靈と肉彈せねばならぬ。去とて吾身は早晩に倒さるゝであらう。吾身倒れて世嗣なくば吾家斷絶する。如何に怨累る祟とは云へ、吾の一代を思ふがまゝ蹂躙りなば、豈も世嗣まで怨は及ぼすまじ……と中納言卿は屹と肚に頷いたのである。それにつけ物の哀も

是よりぞ知る、頼みない浮世に、頼ある戀を出雲の神に求めて比翼連理の契を結び、早く世嗣を擧げて家の礎を定め、且は切て胸の雲耶霧耶の少しだも晴さんものをと良縁を尋ね、同く九州の豪族にて筑紫上野助廣門の息女露姫君を大奥に迎へたのであつた。

中納言卿と露姫君、双れ劣らぬ梅櫻。梅は櫻の色に染まる、櫻は梅の香に匂ふ。他處の見る眼も羨しきまで紅閨の睦言濃かに、玉椿の八千代を籠め、松の二葉の末かけて、妹脊の情淺からず、一双離れぬ鴛鴦の戀の鍵に一人の姫君まで産ませられた間柄であつたのに、好事魔多しとは云へ、實々ここか

虚々ここか、御臺處の御身の上に面白からぬ噂が起ちて、人の口には戸が閉てられなくなつた。

中納言卿の小姓に吉田彦太郎と云ふ宗像一の美少年が居た。月の眉、花の顔、青糸の髪、紅玉の膚、自然に生れつきて業平を映し、大奥附の女中們が戀艸の種であつたが、不義は御家の堅き禁制とて是まで艶冶しい風説とて起ら無つた。然るに端なくも面白からぬ噂のパツと擴つたのである。實に戀は曲者、思案の外、上下の區別ないと清少納言が申されたも嘘でないと大奥の女房達は嫉妬半分、寄ると觸るとヒソ〳〵話。

一夜、中納言卿は獨り書齋に籠り、燈を剪つて書見に耽り

居ると、颯と風の吹くやうな音が次の間に聞ゆる。フト四邊を回視すと、何物とも知れぬ煙の如きものがサハ〳〵と衣摺の音して短檠の下に蹲り居る。屹と正體見屆けんと灯影差向くれば、恍として有り、惚として無く、朦朧として不明い。兎角するうち人の影幻に見にて何事をか囁くもの、如く手眞似、口眞似、切に麾く。中納言卿は興がる心禁じ難く、好し今宵は怨靈の爲すがま、、吾身を任せ遊ばんかな、と突と起ち上りて導かれ行けば、何時か大奥の後園に出づ。折しも月は雲間より現れたが、幻の人影は忽ち消に亡せて見にずなつた……が只視れば洲濱の泉水に架け渡す棧の上に彳む美少は

紛れも無い吉田彦太郎。伊達小袖着飾りて伽羅を色裾に薫らせ、紫の絹もて覆面なしつ菌の草履に身を忍ばせて居る。誰をかまつの木蔭の忍草、忍ぶ戀路の急がる、風情見ゆるので中納言卿は思はず怒を發し『チラと噂に聞き及んだが、偖は……』と叫びも畢へず、腰の佩刀に手を掛け、疾風の如く駈け寄るや。背後よりバラリズン斬り附けた。

三十　鈍刀もて寸斷に慘殺さる、

空行く月も一段に色冴へて照覽あれよかし。戀の妬刄、怨の燒刄、中納言卿は初太刀に不義者を肩先より小袈裟にバラ

リズン、返す二の太刀にて腰車ズバリと斬つて落とし、血烟立つて倒れたと思ひの外、何一つだも手應へなくて、洲濱の蘆に夜風ソヨ〳〵と戰ぐばかり。四邊を回視せど人影だもなく、吾身一人白刄提げて月下の棧に猛然と彳んで居る。月に白刄を翳し透せども、燒刄白き丁字亂に一點の血曇だも見ゐ無い。遉の名將も霎時呆れて茫然たる折柄、誰ぞ吾が足下でゲラ〳〵と嗄らび聲立て笑ふ者がある。中納言卿は屹と背後を回視けば、黑き人影の蠢き彷徨ゆへ、『己れ動くな、其處を』眞二つに斫らんとして再び見れば、月を浴びたる吾影の橋板に長く横り動くのであつた。夜は深々と更けもてゆき、月は

浮雲に隱れて暗く、草村に喞く虫の音最と可憐に聞ゆる。

中納言卿は怒靈に弄ばれた當夜より何となう氣色勝れず、動もせば大熱を發する。御典醫良梅軒を招いて投藥せしめたが効驗が無い。されば露姫君は日夜看護の床に侍りて懇ろに介抱されたが、不思儀にも中納言卿は姫の顏さへ見れば熱度加はる。それかあらぬか御二方の交情は日日氷の如く冷かになるばかり。

之に反し、姫と美少彦太郎との戀の噂は大奥ばかりか、今は城内の雜色、御厩衆の口の端にまで上りた。されば中納言卿は轉た氣鬱して懌ばれぬ。縱し萬犬の虛を傳ふる蜚語にも

せよ、一たび醜からぬ聲の外に漏れたる女性を、吾の大奥こして再び相見にんこと宗像家の汚點なりとて、母子諸共に筑紫上野助廣門の家許に復籍て了ふた。あはれ露姫君は世に濡衣を干す便がなきまゝ、朝の露と消になまほしく、母子相抱いて旦暮泣き明したと云ふ。

中納言卿は御臺所と絶縁してより、薄紙を剝ぐやう、日に増し病氣は全快した……なれど不快の念は悶々として消にやらぬ。美少彦太郎は其後ち中納言卿のため、人知れず暗殺されたのである。

怨靈の祟は宗像大宮司家を搖りに搖り動かす。人生最愛の

生木を裂いて、中納言卿の肉を殺ぎ骨を刺し、未だ是でも是でも苦く無かと云はぬ可り。宛で鈍刀もて寸斷に嬲殺さるゝやうなもの。祟は啻に大宮司家ばかりでない。往る天文廿一年三月廿三日月待の宵、山田御殿に仇の亂入して菊姫御前其他を慘殺した前日、主家の遭難を外處にして大島に遁竄した彼の吉田飛彈守尙時が一門同族の家に今や亦た怨靈の呪の手は幽冥の底よりヒユードロ〳〵と迷ひ出でたのであらう。非業の死遂げた美少吉田彦太郎と云ふは、宗像家に於て權門の家柄であつた。由來鼻祖清氏親王が延喜十四年京都より筑紫に下向せられし砌、隨身した家臣と云ツば占部、吉田、大和、

高向の四姓であつた。此の四姓の家臣が任官叙位せられて清氏親王に供奉したので、宗像家では此の四姓を四任の家柄と稱し、他に比類なく世々重く任用したのである。されば宗像郡では吉田の姓を名乘るを家の譽として同苗の家も多い。なれど怨靈の祟は主に四任の家筋ばかりであつた。嚮に飯盛山の大合戰に拔群の武功を現はした吉田守致は敵將奴留湯久則を刺殺した血汐の眼中に入て盲となり、同族吉田彦太郎は今茲に主家の惡魔として暗殺せられたのである。否や其れどころか、吉田家に對する怨靈の祟は旋風の如く渦に渦卷いて轉た峻烈を極めたものがあつた。見よ〳〵眼を睜つて是より吉

田家に迷出る呪の手をば。見る者、聞く者、誰も彼も『噫怖ろしや』と戰慄らぬものはないだらう。

三十一　チク〳〵と針で刺すやう

宗像大宮司家の宗徒は數ずず〳〵ある內にも鼻祖清氏親王より恩顧譜代の重臣と云ツぱ、彼の四任の肩書きある占部、吉田、大和、高向の四姓に限らるゝ。內にも吉田家は主家と齊しく社家と武家とに分れて、一門は君寵を壇にし、榮花を極めたものであつたが、往ぬる天文の末年、武家の吉田飛彈守尙時が會ま主難を外處に大島に遁れ、山田の御殿に冷酷で

あつた怨は亦た格別であつたと見ゆる。世に怖しい怨霊の祟は社家武家を問はず四任の吉田一家を鮮血淋漓にしたのである。彼の美少吉田彦太郎は堂々たる武家の嫡流であつたのに、武家にあるまじき末代迄の汚名を被つて埒もなく血に塗れて了ふた。之を耻てか弟の貞時、貞永の二人は叔父の尚時と共に後年小金原の大合戦に双れも討死したのである。偖て亦た社家の吉田家を顧るなれば、旋る因果を繰り返して、血で血を洗ふ血の雨降りて、笠宿りする軒もないのである。中納言卿の重臣に吉田伯耆守重致と云ふが居た。社家の吉田勘解由左衛門の妾腹であつたが、フト山田の怨霊に魅られたか、本

腹の式部少輔を世に亡きものとして吉田の宗家に推し直らんと謀反氣ムラ〳〵と起る。一日、式部を詞巧に誑らし賺かして釣り出し不意撃して斬り殺した……が式部の遺孤で幼名を龜若麿と呼ぶ當年二歳の稚兒が未だ一人居た。是ぞ後日の累なりとて、上八郷の内、元浦の式部少輔が屋形に討手の人々を向はしむ。乳母は斯くと聞くや泣き頽れ、可愛の麿を懐に犇と抱き、力なく〳〵宵暗に紛れて人知れぬやう屋形を脱れ出で、何處ともなく落ち行くうち、辻と云ふ處にて早や仇に追附かれ包圍まれた。乳母は悲鳴を揚げて附近の農家に匿れたが、追手は容赦なく家内に亂入して逃げ惑ひ泣き狂ふ乳

母もろとも麿をば無慘にも田樂刺に刺し殺したのである。あはれ是にて社家吉田の宗家は世嗣なく斷絶して了ふた。伯耆守は庶家より出てゝ終に宗家を乘取り、本懷を達したが、山田の怨靈は更に怨靈の祟を産みた。式部少輔、龜若麿及び乳母の怨靈に伯耆守が一門は專ら祟られて、家に凶事絶へず散々に惱まされたのである。それゆへ社家の吉田家も大に怖れをなし、後年に及んで亡魂に謝罪のため屋形跡の元浦と、龜若麿が臨終した辻とに新らしく祠を建て『地主の社』と崇め鎭めた。

山田の怨靈は嚮に蘆屋の平釜を墓の上に偃せられてから一

段に怨を增して祟の方法が當初とは違つて來たやうだ。是までは多く熱病に罹つて待て雲時なく卽死したのが、今では人の肉身に啖ひ入つて、チク〳〵と針で刺すやうに、惱まされる限り惱ますのであつた、で怨靈も時には物見遊山のためか、黑髮を蓬に振亂して白衣を長く着流し、人の眼に見ゆるばかり白晝鮮明にフハリ〳〵空中を飛行しながら勝浦の七谷を遊び巡りて當國一の大濠の上で消ゆる。此處は早に佛門に歸依して德望一代に高かつた第三十六代宗像氏國卿の城址であつた。此處の大濠が怨靈の樂園であつたが、時には又た第十五代宗像氏平卿の古城があつた許斐岳の山上に峨々たる巨巖も

て封じられ人の見たことないと云ふ秘密の池に隠れて了ふこともあつた。其れかと思ふと復た夜半の嵐に誘はれて松明ほどの火の魂となり、岳山城の火見櫓の上を蜘手に舞ふ。其の光は不透明であつて青く白く、夜半には低く飛び、夜の次第に明け近くなるにつれて高く飛ぶ。岳山の木立には多くの猿が棲で居たが、怨靈の氣でも受けて使でもしたものか、火の魂の低く山上に飛ぶ時には、猿は群なして木より木に飛び、何れも城の北口の石峠に集り、キャツ〳〵と叫び喜んで舞ひ狂ふたと云ふ。火の魂は其れから何時でも糟屋郡の花見松原の方に飛で行く。左なくば席内の大椋木に隠れて了ふ。されば『喃な怖ろしや』の聲は宗像領内ばかりで無い。近郷近在の人々まで怨靈の祟を怖れて、夜陰は勿論、白晝ですら人里遠い山中等は人の通行杜絶ゆる。會ま道行くにも今に怨靈が出て來て呪の手に掴まれはせぬかと、空を眺め、前後見廻して孤鼠〳〵と趨り行く。

三十二　平和を保つ政略上の婚姻

怨靈の祟は寄せては返し、返しては寄する汐の滿干につれ陰に隠れ、陽に見れて大風の死活する如く息氣を吹く、陰々と人の肉に啖ひ入つては毒氣を吹ヅかけ、五臓六腑を攫亂し

て萬有る苦悶を注射なし、自分と自分で自滅さする。怨靈は人の自滅する苦痛の有様を見ては凱歌を揚げんばかり忽ち揚々として姿を現はし、此處彼處の野山に遊び耽くる。されば怨靈の伏魔殿たる宗像領内の人々は半ば死の棺桶に足踏ン込みたらんやう今日の命も明日は思ひやられ、何れも生きたる血色とては無い。

下の怖るゝところは上の悲むところ。萬民の長者たる君が當年の心痛は亦た如何であつたらうか。中納言氏貞卿は宗像の大宮司として、又た筑前有數の弓取として、領内の萬民に代り、此處怖ろしき怨靈と終始惡戰苦鬪を繰り返さねばなら

ない。固より手に捉へられ、足に躡まへられぬ怨靈を如何にせん。會ま烟の如き姿、風の如き聲の眼に映り、耳に響くばかり。されば虎と見て石に立つ矢も無いのである。さりとて天も地も人も恨まんやうもなく、身自から甘んじて生ながら犧牲の座に侍る。切て生あるうち世嗣を早く設けたさに御臺所を迎へたのであつたが、若君ならぬ唯だ一人の姫君を産ませ給ふたばかり。其内ち思はぬ風吹き起りて妹脊の鏡を碎き破られたのである。で中納言卿は一段に心急かれ、永祿十二年大友宗麟と和睦してより、宗麟の養女たる大友家譜代恩顧の勇將臼杵越中守鑑速の息女を更に大奥として迎へた。

嗚呼、怨靈の呪の手は、祟る永々の道草として色々の九字を切り、印を結ぶ……とでも云はまほしく死中に活ありて一たびは花を咲かせ操縦自から妙を極むる。嚮に狂亂の人となして現在の生母照葉の方の咽喉に啖ひ附かした中納言卿の令妹菊花媛は、其の後ち年久しく物狂はしくあつたが、圖らずも本心に返り、良緣あつて大友宗麟の媒介に由り立花城主立花道雪に嫁ぎたのである。道雪は大友家無二の忠臣で、姓を戸次と云ふ。元龜元年豐後藤北の庄、鎧嶽の城主より轉じて筑前粕屋の立花城主となり始て立花姓を冐す。之より先き、宗像家は道雪の配慮にて大友家に預け居た西郷若宮の兩庄を

還附された。されば中納言卿は之が德に酬ゆべきためか、菊花媛の化粧料田として特に西郷の庄三百町を道雪に贈りた。這は西郷の庄は立花山の麓を繞りて神宮の湊まで宗像家の領内であつたゆへ、此まで敵味方と分れて居た間は、立花城主の常に心危ぶみ、最も垂涎て居た地區であつたから。家筋から云へば良緣に違ひないが、道雪は既に大奥を迎ふること二回、双れも死別れて玆に菊花媛を迎へたので、媛は年齡二十五であつたのに、道雪は早や人生の五十を越ゆる九つ、白髮の老人であつた。固より當時戰國の世の習、大友宗像兩家とも長へに平和を保つ政略上の婚姻であつたらう。さるにても宗像

家にては石松加賀守秀兼、大和長左衞門二人の重臣まで永代に附添へて入輿せしめた。又た立花家では花嫁を迎ふるため美盡し善盡して大禮の宴を張りた。時しも毛利元就は病死なし、其の以前に宗像家より毛利家に入れし人質は計を以て盡く奪ひ返し、是れでこそ一先づ干戈の聲も靜まりたらうと中納言卿はホツと一息吐いたのである——知らずや怨靈の祟は早や此間に魅りて居た。會ま平和を買はんとして却々に戰亂を速いた譯。後年に菊花媛の化粧料田西鄕の庄より、修羅の兵火は炎々と塔より高く燃へ上り、筑前の天を大闇黑に覆ふたのである。

三十三　血の池地獄に生埋す

怨靈六人の呪の手に掴れた宗像家は見るも無慘、聞も可憐。殺しては活し、活しては亦た殺さるゝのである。中納言卿は宗像家の世嗣を設くべくたため、豊後より新に御臺所を迎へたが、生涯を通じ、姫君は三人までも設けられたに、世嗣の若君としては一人だも生れ得なかつた。想は鵠の喙と嚙ひ違ふたは之ればかりで無い。宗像領内の平和を保つべきため御妹菊花媛を立花家に嫁入せしめたばツかり、國内に思はぬ騷動を惹起したのである。

近年は永らく各地とも干戈の聲絶にて居たが、宗像家の菊花媛が立花家に輿入れあつた當時、化粧料田として西郷の庄を立花家に贈りたので、是まで宗像の家臣であつた西郷の住民は一時主家に離れ途方に迷ふて若宮の庄に移住した……が是まで年古く住み馴れた故郷を敵方に渡したばかりか、立花家の人々は宗像家より菊花媛を人質として迎へ取つたかの如く云ひ觸らす者さへあつて無念遣る瀬がない。機會もあれかし、何時か一度は此の鬱忿を晴さんものをと待ち受くるうち、天正九年十一月、嘉摩郡秋月の城主秋月種實は兵を起して毛利鎭實を鞍手郡永滿寺の鷹取の城に不意擊せんとの風說

傳はりたので、鎭實は豫め防戰の用意に、彈藥と兵糧の加勢を立花道雪に賴みた。されば道雪は同年十一月十二日由布雪可、小野和泉等を奉行となし、六百餘騎をして彈藥と兵糧とを鷹取に輸送すべく發足せしめた。

西郷より若宮の友池と金丸とに移住した住民のうち、深川右京進貞國、原九郎貞惟、井原次郎左衛門等五十餘人は斯くと聞くや雀躍る。立花勢が鷹取の城に駈け參ぜんには是非とも若宮を通らねばならぬ。機會こそ到來れ、途中に要擊せんと內々手配中、早くも其れと知れ、中納言卿より屹と無謀の暴擧なきやうとの嚴命あつた。それゆへ本意なくも手を空しく